

航宙空母シナノ 太陽
系防衛戦線

朱鳥洵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦2203年末。

第11番惑星上空で演習を行っていた航空空母シナノに辞令が下る。

ガトランティス戦役を終えた地球にも密かに新たな敵が接触していたのである。

今、ヤマト級4番艦の戦いが幕を開ける。

目次

第1話	「辺境より」	1
第2話	「侵略者の影」	13
第3話	「守衛の翼」	24
第4話	「盾となりし」	35
第5話	「侵略者の名」	47
第6話	「旗艦突貫」	58
第7話	「地球とガミラス」	67
第8話	「届かぬ願い」	80
第9話	「防衛ライン」	94
第10話	「継がれる想い」	107
第11話	「願いの灯」	120
第12話	「未来へ、希望と共に」	

第13話 「宇宙より地球へ」 ——

第1話 「辺境より」

「レーダー、目標を捕捉」

「作戦開始。コスモタイガー部隊は、本隊ヘターゲットを誘導せよ」

漆黒の宇宙に光るのは、高速で飛ぶ機体のエンジン。

緑の惑星に向かう編隊は、ミサイルを放ち上へと離脱する。

「ミサイル、目標へ着弾。目標、こちらへ移動を開始」

「砲撃準備。タイガーは任務継続」

視界に入った長い髪をかきあげ、彼女は艦長帽の下から前を見据えた。

「目標、主力戦艦の射程圏内へ」

「まだよ」

代わる代わるミサイルを撃っては離脱する編隊の光が艦橋から見え始める。

「距離7000」

「主砲照準補正」

ドレッドノート級の主砲がわずかに上を向く。

艦橋の前に装備された15.5cm三連装砲も同じく上を向き、エネルギーが回る。

「距離2000」

「全機離脱命令。主砲発射用意！」

緑の星を眼下に見て上へ離脱した機体のコクピットからは、いくつもの赤い光点が見えていた。

「距離700！」

「撃ち方はじめ！」

「……っ、うちーかたーはじめ！」

三隻の艦艇から放たれた青い光線は、宇宙の闇に爆炎の光を灯す。

レーダーから消えていく反応を見て、レーダー手は肩の力を抜いた。

「ビーコン、反応消失。掃討完了」

彼女の視線にうなずくと、艦長は口を開く。

「演習終了。全機シナノへ帰投せよ。……お疲れ様」

髪をなびかせてエレベーターの前に立った彼女は、そのまま前を見ずに足を止めた。

「戦術長」

「は、はい！」

「撃ち方号令に迷いがある。実戦では命取りになるから、気をつけて」

「はい……」

開いたエレベーターへと入り、艦長は艦橋をあとにした。

「あーごめんね？ 沙耶、ちよつとキツイでしょ？」

「ああいえ、それは……」

「気使わなくていいから、ね」

レーター席から立ち上がり落ち込む彼の肩を叩くと、彼女もエレベーターへと乗り込んだ。

「じゃあお疲れ〜」

陽気に手を振り、彼女は下へ向かう。

第11番惑星上空で艦載機を収容したその艦は、ヤマトと同じ艦影を持ちながら後部に格納庫を兼ねた飛行甲板を備えていた。

ヤマト級4番艦、航宙空母シナノ。

時間断層で作られた最後の艦のひとつであり、戦艦ベースの設計がなされたヤマト、武蔵、銀河とは全く違う設計思想で建造された艦。

48センチ砲は装備せず、ヤマトでは副砲として扱われた小口径砲一基とヤマト級共通の魚雷、ミサイルと甲板防衛用の煙突ミサイルを攻撃兵装として持つ他は、主砲が置かれていない甲板に搭載されたパズルレーザー砲があるのみ。

攻撃力はヤマトはおろか武蔵にすら劣る。

それでもこの艦は旗艦能力を持ち、この第11番惑星で演習を重ねながら出撃の時を待っていた。

「沙耶さや、いる?」

ノックの後に聞こえた声で、彼女は扉を開けた。

「なに、夏姫」

「何じゃないってば。入るよ」

言葉より先に部屋に入り扉を閉めた彼女は、目の前に立つ親友の肩を掴む。

「沙耶、堅いつ!」

「……………は?」

「前からずっと言ってるよね、愛想良くしなつて!」

「そんなの……………」

「そんなの、じゃないの! みんな沙耶の事怖がっちゃってるじゃん!」

「えっ、そう……………なの?」

「そうなの! だから」

肩から手を離れた夏姫はそのまま両手を彼女の口元へ持っていく、人差し指で無理や

り口角を上げにかかると、

「笑顔でって言ってるよね!?!」

「夏姫……いたい……」

「沙耶が笑顔を感じるまでやめない」

「覚えたから」

「嘘言わない。艦長ならもつとこう……部下から慕われなきや！」

「なふき……ふよい……」

「沙耶が笑わないのが悪い」

「わらひわううあい」

「何言ってるのか分かんないんだけど……」

しかし彼女の抗議の意思は伝わったのか、夏姫は手を離した。

「私悪くないのに……」

「またやろうか？」

「それは結構」

ふーん、と腰に手を当てる眼下の親友を睨む。

「ま、いいけど？ 飴と鞭、みたいな」

「……それ、私嫌われ役じゃない？」

「そ、そんな事ないよ？ 大丈夫、大丈夫」

直後、室内に呼び出し音が響く。

「じゃ、あたしはこれで」

「うん。……こちらシナノ、司令部ですか」

西暦2203年末、地球

「では、失礼します」

敬礼をして司令室を出た沙耶は、そのままの足で海辺へと向かった。

途中、実習帰りの学生たちとすれ違った。

「お兄つてば帰ってくるなりぐーたらしてさあ」

「えー？ でも武蔵の戦術長なんですよ？」

「いやそうなんだけど——」

——武蔵。あの娘は……。

そんな思考を振り払った彼女は、足早に栈橋を登る。

塀で阻まれ隔離された海には、ガントリィで固定された艦が並んでいた。

飛行甲板と半分水中に沈んだエンジンズルを眺めて、深いため息を吐く。

「お悩みですかな」

「っ？？」

その声に振り向くと、同じ階級章をつけた男が立っていた。

「近藤艦長……」

「覚えていてくれて何より。そして遅れながら、艦長就任おめでとう」

「いえ……ありがとうございます」

近藤は横目でシナノを見る。

「あの、近藤艦長」

「ん？」

「アルタイルの皆さんは……どうしてますか」

「武田艦長は退役したと聞いたよ。宗方隊長は武蔵で世話になっている。そういう君はどうなんだ、アルタイルの副隊長」

唐突な問いかけに後ずさり手で顔を隠す。

「やめてください。元々私に、誰かを束ねる力なんて無いんですよ」

「少なくとも信頼は得ていると思うがね」

「……部下と、どうやって接しているか。みんなと、どうやって話しているのかわからないんです」

そんな、絞り出すような声に、彼は。

「なあんだそんな悩みか！」

「そんなってなんですか。こっちは真面目に——」

「隣のドックを見てみる」

彼に連れられて見たドックには、シナノと同じ艦体をもつ艦が係留されていた。

「えっ——？」

その姿に息を呑む。

痛ましいほどに傷だらけで、係留されているのにまっすぐ浮いていられない。

「武蔵、どう見える」

「どう……」

武蔵の背は、彼女達に伝えられていたものとは明らかに違う真実を物語る。

「これは——」

「艦がここまで損傷する戦闘指揮を、お前は良しとするか？」

「……状況次第、です」

「質問を変えよう。艦が沈んでも構わないとする戦いに、もちろんと領けるか」

「それは……」

——答えられない。

——だってそれは、部下に死ねと強要する事だから。

——だってそれは、ただのエゴだから。

「俺は、その戦いを指揮したヤツに次を任せることを考えている」

「……！」

「艦長にとって大事なものは、部下を信じる事だ。俺たちは間違いだと思った時に、倒れそうになった時に判断を下せばいいだけだ。あとはどーんと構えていりゃいいんだよ」

快活に笑う彼の声を背に、吹き飛んだ第三砲塔と穴の開いた艦橋後部ブロックを見上げる。

——私に、こんな決断ができるだろうか。

「まあ難しく考えるな。俺もちゃんとできてる自信はないからな」

「艦長」

近藤が彼女の肩を叩いた直後、彼の背後には敬礼をする男女が立っていた。

「どうした有賀、佐伯」

「いえ。なんとなく」

「私は義哉さんの付き添いです。今は謹慎中で、武蔵の修理には関わられませんから」

沙耶よりも少し若いと思われる2人は、棧橋から見える武蔵の背を見て微笑む。

「謹慎中？」

「見ての通りだ。武蔵は、ヤマトとガミラス艦隊が宇宙で戦っている間に無断発進して地球に侵入したガトランティス艦隊と戦った。だから、武蔵のクルーは全員謹慎中なんだよ」

「……地球を守るための戦いだっただのに、それを咎める事が司令部にできるんですね」
大きく抉れた破孔をもう一度見て眉を潜めると、彼女は近藤に頭を下げ、踵を返した。
海風になびく髪を見つめていた彼の裾を引っ張った柑奈の方を見ると、彼女は有賀を
睨んでいるようだった。

「えっと、柑奈？」

「……むう」

「何かしたっけ、俺」

「知りませんっ」

ふいっと不機嫌そうに視線を移した彼女に怪訝な顔をしつつ、有賀は近藤に問いかける。
る。

「あの人は」

「もしかしたら、未来のお前かもしれないな」

「……はっ？」

足早に棧橋を歩く彼女の背中を見て、近藤は微笑むのだった。

「そっか、武蔵はそんな事になってたんだね」

宿舎に帰って夏姫に一通り話すと、彼女はそれだけを返してコーヒーを入れた。

「それで？ シナノは次どこに行くの？」

「銀河中心方面から断続的に接触している艦隊の掃討、みたい。補給は雷撃型コスモタ
イガーに関連する物も多いし……」

「艦隊戦かあ……味方艦多くなると大変なんだよね」

「しつかりしてよね。今回はガミラス艦隊もいるんだから」

「うえ、本当？」

渋い顔で頭を掻く彼女に笑いかけ、沙耶は端末に目を落とす。

「……艦長、か……」

部屋の一角に立てられた二つの写真を眺めて、沙耶は過去へと思いを馳せる。

——教えてほしい。私が、何をすべきか。

「今日は星が綺麗だよ。沙耶も見てみよ？」

「星なんて、宇宙に出ればいつでも……」

「地球でのんびりしながら見る星が一番綺麗なんだよ。ほら、こっち来て」

手招きをする夏姫に呼ばれ、開け放たれた窓際へと歩き出す。

そこには満点の星空——天を穿つ天の川と色とりどりの輝きが瞬いていた。

「ねっ、綺麗でしょ？」

「ええ……とても」

宇宙をゆく艦もなく、ただ自然の光だけが満ちる空の下で。

先程までの悩みなど些細なものだと思わせるようなその光景に、2人はしばらく目を奪われていた。

その向こう側では、地球に迫る艦隊を食い止めんと戦う艦隊の姿がある事を頭の片隅に置きながら。

——第1話 「辺境より」——

第2話 「侵略者の影」

「おい、こつちに寄せなつて！ 次が入らないからー！」

つなぎを着て翼の下から顔を出す彼女の声で、入り口付近でもたもたしていた機体がこちらへと牽引されてくる。

「格納庫狭いんだから入れ方には気をつけなよ！」

釘を刺して再びペンチを取ると、ため息とともに作業に戻る。

「機関長」

「ん、うちに何か用？」

刹那、若い男が近づいてきた。制服の色から機関室勤務だろう。

「エンジンの調整中でしたが、コレが如何ともし難くて……」

「波動エンジン？ あーこれはね……」

そこに転がっていた赤のマーカで印をつけ、彼に凶面を突つ返す。

「これでできるかい？」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ戻つた戻つた。うちも中々忙しいからさ」

「そうみたいね」

「ええ本当に……つと、艦長でしたか」

姿勢を正して敬礼を見せた彼女に返しながら、沙耶は少し困った顔をする。

「私とあなた歳変わらぬのに敬語はいらぬでしょう」

「階級ですよ、階級」

ニツと歯を見せて笑う彼女に微笑む。

「それで、艦載機の補給は順調なの？」

「ええまあ。雷撃型と通常型が混ざって今はこんなぐつちやですけど」

「蓮も少し休みなさい。倒れても知らないから」

「ひと段落ついたら寝ますよ。心配なさらず」

「そう。無理しないで」

「りょーかい」

立ち去る艦長の背中を見送り、彼女はまた作業へと戻る。

——そんな疲れた顔してたかな、うち。

第一艦橋

窓から入る太陽光とモニターの明かりだけが満ちる中、目薬をさして肩の力を抜く。

「ふいー疲れたー」

「お疲れ、楠木さん」

「そういうアンタはなんでここにいろの、光洋」

「一応航海長なだけどな俺」

「航海長は出港するまで仕事ないでしょうが」

「まあそう冷たいこと言いなさんな。半年もいりゃあここが落ち着くつてもんだよ」

軽口を叩く彼に深いため息をつくど、彼女はまた作業に戻る。

「そーいや朱音はご両親に会ったのか？」

席に戻った彼は前を見て聞くが、彼女から返答はない。

「……ちゃんと会えよ」

「分かってるつての」

少し苛立ちの混ざった声で答え、また視線をモニターへ向ける楠木であった。

展望室

「なあ、直輝」

「なんだい戦術長」

「その呼び方はやめて欲しいんだけど……」

肩を落とす彼の姿を軽快に笑い飛ばすと、片耳に当てていたヘッドセットを外して同期の横顔を見る。

「それで、なんだって？」

「ああえーと……艦長の事なんだけど」

「惚れたか？」

「違う」

「美人だと思うんだけどなあ」

「うっさい。そうじゃない」

「何か思う事でも？」

「もしかしたら……艦長は何か悩んでるんじゃないかなって思うんだ」

彼の言葉に天井を仰ぐ。

「強い言葉は弱い心の現れだ、とか言いたいのか」

「そうじゃない。あの人にそれは当てはまらないよ。でも、僕らと話すときに迷いがあるのは確かだ」

それに「ふーん」と返し、横目で同期の横顔を見やる。

「でも、その迷いに気付いても尊がその態度じゃあ無理だ」

「えっ？」

「お前、正直言つて艦長の事怖がつてるだろ」

「ぐっ……僕は得意じゃないだけ。そもそも戦闘指揮なんて僕には……」

「任されたのは尊だよ。任されたからには、受けたからにはやり通せ。それが道理だ」
彼が出て行つた扉を見つめて、戦術長の重荷を噛みしめる。

「道理……か……」

青空が見える窓に背を向けて俯く。

「分かつてる……と、思つてただけどな……」

——数日後——

ゆっくり左右に開くドックの門。

ドックに満ちていたものと海の水が混ざり合う中を、白波を立てて進み始める。

ブロックを分ける壁からは傷ついた武蔵の艦橋が見える。

「波動エンジン、フライホイール始動」

「フライホイール始動。第1格納庫の慣性制御開始」

航海長と機関長の声で艦内に甲高い音が響き始めた。

「2分後に垂直上昇、エンジンに点火し地球圏を離脱する」

沙耶の指示にシナノは速度を緩め、海上で静止する。

艦外への慣性制御と共に艦底のスラストに点火し、海水を押し除けながらまっすぐ上昇し始めた。

「格納庫、機体の繫留はちゃんとできてるんでしょうね！」

『大丈夫です、今なら艦が垂直になっても機体だけは微動だにしません』

「んなことしたらうちらがもたないっての。加速した時に機体ぶっ壊れたらあんならのせいだかね」

『分かってますよ』

軽い通信を終えて波動エンジンから火を噴いたシナノは瞬く間に垂れ込めた雲を抜けて青い空を突き破り、漆黒の宇宙へと突入した。

「月面基地から入電。無人ドレッドノート級5隻をシナノの識別信号を目標にして発進させたとの事」

「工藤くん、護衛はドレッドノート級だけなの？」

「……ええ、そうみたいです」

「うひゃー、重艦隊だあ」

工藤と沙耶の会話に口を挟む夏姫。

「でも、こつちに駆逐艦と巡洋艦がない分ガミラスも参加してくれるんですよ」

「尊の言う通り。えーと内訳は……」

「デストリア級、ケルカピア級、メルトリア級とゲルバデス級、ガイペロン級。合計16隻よ」

「クリピテラ級はいないのか……」

思わず口をついた航海長に、沙耶は極めて冷静に説明を始める。

「今回は11番惑星の公転半径を超えた場所です。長期間の戦闘になる。基地があるとはいえ、居住性の低いクリピテラ級は兵士にとって苦行にしかならないわ」

「確かにね。沙耶が言う理由で選定していたなら巡洋艦以上の居住性がないと」

「ガミラスも私達と同じ人間なのだから、目に見えた危機は避けたいでしょう」

遠くに見える月と、ムラサメ改を引き連れたドレッドノート級をすり抜けると、衝突防止灯をともした5隻の艦影が見え始めた。

「無人艦から制御識別信号を受信。本艦を旗艦としてリンクします」

技師長、楠木朱音のモニターに「LINK」の文字が表示される。

同時に外に見える5隻も反転し、シナノを囲むように展開して月面を通り抜けた。

「リーダーに感、ガミラスの識別コード……本艦と同行する16隻と確認」

「任務にあたる22隻、予定通り合流しました」

船務長、神橋夏姫と戦術長の御上尊の言葉に頷く。

「シナノ艦長、如月沙耶より達する。本艦隊は只今より太陽系外縁に接触している敵性

艦隊への対処のため出撃する。無人艦は本艦とワープ連動。ガミラス艦隊は本艦と合わせ、2分後にワープへ突入。座標送信」

艦橋の上につけられたモニターには、2100年以降太陽系外縁天体となった11番惑星より外にマーキングがなされる。

地球から数光年離れたそこは、太陽ですら数多ある恒星の一つでしかなく夜空に溶け込んでしまう。

21隻を引き連れているとはいえ、地球の有人艦艇はシナノ一隻。

孤独な戦いと称しても差し支えはないだろう。

「全艦、ワープ！」

ほぼ同時にエンジン出力を上げた艦隊はそれぞれワームホールへと突入して消える。

次に彼らが姿を見せたのは、小惑星ひとつない空間であった。

「ワープ終了。11番惑星の公転軌道外、地球から銀河中心へと移動しました」

「レーダーに感あり、距離3000。交戦中なの……?」

刹那、轟沈を表す大きな輝きが目に入る。

「全艦へ通達。第1戦闘配備、艦載機発艦。機種はシナノの雷撃機と直掩機に限定。ガミラス艦隊は巡洋艦クラスの速力をもって突撃せよ。第三格納庫はシーガル用意、医療班を分乗させて発進待機。急いで！」

エレベーターを登るコスモタイガーと共に、艦底ハッチから直掩用の単座戦闘機が射出される。

飛行甲板を蹴り出す雷撃機は重い爆弾を引き下げて旋回し、直掩機との合流ポイントへと向かう。

「雷撃機28機、単座型12機が発艦しました」

「飛行甲板内部の単座型は10機を対艦装備にして待機」

「ガミラス艦隊、航空隊に続き突撃！」

シナノを囲うように待機していたデストリア級4隻とケルカピア級7隻が加速し突出する。

「本隊も前進して敵の捕捉を。残存艦艇の数は」

モニターに視線を落とした夏姫はその反応を目で追い振り向いた。

「残存有軍艦は3隻、敵は27隻！」

「つ……友軍は有人？」

「そう、有人艦艇が3隻」

「友軍に本艦隊が地球より派遣された事を通達。この戦闘は敵の殲滅ではなく敵の撤退を目的として行う！ 攻撃隊は敵艦隊の武装のみを狙うように！ 特攻してくるなら撃沈もやむを得ないものとする！」

艦橋に警報が鳴り響く。

「艦長、ですがそれなら敵の殲滅を目的にして機体を出せば——」

「部下に人殺しを命じることに正義なんてないのよ！」

「っ……………?」

「だから……簡単に『殲滅しろ』だなんて言えない……そんな指示を簡単には出せない」

立ち上がった沙耶はまっすぐ前を見据え、視線を戦術長に合わせて微笑む。

「仲間を守りましょう」

「はい」

黒煙を上げ、戦列の崩れた艦隊に迫る艦影は、コンゴウ型を思わせる葉巻き型の姿を示していた。

指向するドレッドノートの主砲を粉碎した戦艦が次弾を用意する。

瞬間、雨のように降り注ぐミサイルによって戦艦とそれに続く艦が爆炎に消えた。

友軍を守るように飛び去ったコスモタイガーの編隊はそのままターンし、残りの艦隊に魚雷を放って離脱する。

魚雷が撃ち損じた兵装は高速機動で接近したガミラス艦隊により無力化されていた。

「先行したガミラス艦隊より、有人艦艇は大破しつつ健在との報告」
「護衛機と共にシーガル発艦。生存者の救助を行い帰還せよ」

工藤の報告を受けた沙耶の声でシナノの艦底両舷の格納庫シャッターが開く。

そこから露出したシーガル2機と飛行甲板を飛び立ったコスモタイガー4機が爆発轟く戦地へと赴く。

「コスモタイガー隊とガミラス艦隊が戦線を押し返したら前進します。ゲルバデス級とガイペロン級に対艦装備の攻撃隊発艦要請を」
「了解」

破壊された残骸漂う宇宙を征くシナノ。

発艦を急ぐ三段空母と戦闘空母を飛び立ったガミラス機の光を見送りながら、沙耶はその先を見つめていた。

シナノの戦いは、まだ始まったばかり。

——第2話 「侵略者の影」——

第3話 「守衛の翼」

「シーガルより通信。救出活動を開始した模様」

「第一次攻撃隊が帰投してきます」

「蓮、格納庫をよろしく」

「あいよ」

「単座型を第2格納庫から射出する。ガミラス空母に爆撃機発艦要請」

三段に分かれた飛行甲板から飛び立った機体は、翼に計九つの爆弾を懸架していた。

七色星団でヤマトを爆撃したものの一つであり、バーガーが乗っていたのと同型の機体。

コスモタイガーとと共に編隊を組んだ爆撃隊は再び漆黒に消える。

艦橋から飛び出した機関長は直通のエレベーターで格納庫へ向かい、帰投した機体への補給指示を行っていた。

「雷撃機優先で下させな！」

『本艦は艦載機収容後、ドレッドノート級と共に前進し救助活動中のシーガル及び大破した艦艇の防衛活動を行います』

「ひゅー、なかなか無茶言いなさる」

艦内放送を聞いた蓮の下手な口笛と呟きを聞いていたのか、作業員達の伝達が通信で聞こえてくる。

「ここさつさとやらねえと人が死ぬぞー！」

「人助けだ急げ！」

シナノ後方から着艦の様子を確認していたゲルバデス級は沙耶からの指示を受けて飛行甲板の中腹を回転させて砲塔を宇宙へとさらけ出した。

「艦載機収容率56%」

「砲雷撃戦用意」

「艦長」

指示を出した沙耶に、席を立ち振り向いた御上が声をかける。

「なに？」

「本艦を前に出すのは、自殺行為と見られても……」

「シナノの飛行甲板を含めた船体のサイズとそこから発生できる波動防壁の出力以外に、救出部隊を砲火から守る方法はない。もちろんドレッドノート級とゲルバデス級、先に戦場にいるガミラス艦隊を突破された場合の防衛策よ」

「……了解」

『艦載機入れ終わったぞ艦長！』

御上が席についたのを確認した沙耶は、少し前のめりで口を開く。

「総員加速Gに備え！ 最大戦速！」

ほぼ同時にエンジンを灯した艦隊は砲塔を指向させながら前進をかけた。

救出活動を行うシーガルに対し攻撃を用意していた艦は横から飛来した無数の陽電子の束により爆散し、爆炎の盾となるように巨艦が間に入る。

艦底のシャッターを開けると、中から数名が破口に取りつき中へと入っていく。

破壊されたドレッドノート級を右手に、シナノは砲門の一切を左へと向けた。

破片はシナノの周囲に展開されていた波動防壁に遮られ軌道を変える。

衝突コースにいたものも飛行甲板から飛び立ったコスモタイガーや甲板の機銃が破壊して無害なサイズズへと変わっていく。

「攻撃艦隊、敵の兵装の4割を無効化、敵総数の3割を撃破！」

レーダーの反応は徐々に消えている。

「攻撃続行、防衛線を押し上げて！」

後方から放たれたシナノのミサイルが敵に命中し、それにつられて艦隊も前進していった。

敵の上空から断続的に続く空爆が更に戦力を削る。

後退する敵艦隊。

しかし。

「前衛のガミラス艦から通達、増速し前進する艦を確認。特攻とみられるとのことです！」

「迎撃用意！」

黒煙を上げ、ゲルバデス級の脇をすり抜けた艦はドレットノート級の砲撃の間を縫って防衛線を突破する。

シナノの砲身が僅かに下に角度をつけ、青い光を溜めはじめた。

「戦術長、砲撃は敵艦の破口に当てられる？」

「……た、多分、行けると思います」

「なら破口に当てて。そうしないとシナノは沈むわ」

「は、はい」

前を見据え、モニターに映されたターゲットマークの中心を僅かにずらし、そして。撃ち方はじめ！」

砲口から放たれた3本の陽電子の束は、僅かに艦の中心から逸れて1本が破口から内部へ入り込んだ。

砲撃は内部のバルブを消し飛ばし、エンジンを粉碎する。

内部から膨張した艦は装甲の継ぎ目からエネルギーを放出しながら爆発に消えていった。

波動防壁に当たる破片の発光を見て沙耶はため息をつく。

「航空隊より通達。敵艦の約7割を戦闘不能に持ち込むも敵は依然戦闘の意思あり」

「救出部隊より、現在までにドレッドノート級内部に生存者確認できず。シーガル一機を引き上げ、一機ぶんの人員で捜索の行き届いていないエリアを回るとのこと」

「そう……」

通信士からの言葉に俯く。

——やっぱり、私じゃ救えない……。

——英雄の艦だつて。その同型艦だつて。クソくらえ。ヤマトも、銀河も。

「ふう……」

そんな思考を振り払い、沙耶はモニターを見る。

「救出部隊の任務完了まで本艦はここを動かさず指揮を行う。敵の数は」

「約半数、撤退行動を開始しています」

「わかった。全艦に通達、追撃はせず周辺警戒に努めよ」

その通信を聞いた艦と機体が反転するのを見届け、沙耶は大きく息を吐く。

——同刻、地球。

「武蔵を修復し、新たな旅へと向かってもらいたいと考えている」

司令部に呼び出された近藤、有賀ら武蔵の上級士官へと長官が放ったのは意外な言葉であった。

「武蔵を、ですか」

「そうだ。今は詳しい事は言えないが……」

長官が近藤達にモニターを向けると、そこには武蔵への改装案が映し出されていた。

「この通り、武蔵には改装命令を下そうと思う」

その姿は、波動砲栓を取り払い波動砲を修復、さらに対空砲の増設など戦艦然としたもの。

ドームですらも装甲を付け足し、実質的に実験艦としての運用ができない姿となっていた。

「これを——」

「自分はこの改装案を飲み込めません」

「義哉さん？」

隣に立つ有賀を見上げる柑奈に笑いかけ、彼は続ける。

「そのあり方を変えてまで、武蔵がどうしても前線に出なければならぬのですか」

「あり方……?」

「今や地球には時間断層で作られた波動砲搭載艦が多数あります。それらを作るため犠牲になったのは他ならぬ武蔵だと聞きました。クルーの中にはそれを経験した者もいます」

裾を握る柑奈に目を配り、さらに続ける。

「武蔵に波動砲を搭載してまで防衛力を増やす状況ではないと自分は考えます」

「私も賛成です。その上で、前回の旅や地球での戦闘からご提案したい事がいくつか」

有賀に同意し一歩前へ出たのは水月。

ウインクで柑奈に合図を出した彼女に促されて、柑奈は手に持つ端末を手渡す。

「前回の武蔵、そしてヤマトの旅路の記録を見て、経験して、長距離を航行する艦には攻撃兵器よりも探索や防衛を目的とした装備が必要だと考えています」

「現場の声は大事だ。続けてほしい」

「ガトランティス艦隊に対する武蔵の地球での戦闘目的は誘導と地上の防衛でした。その際、義哉さん……有賀戦術長は協力的な攻撃兵器ではなく、艦のエネルギーを介さず遠隔に展開できる波動防壁のようなものが必要と話していました。そして私自身、現在装備されているものよりも広範囲を探索可能な装置の搭載が必要と思います。これは、それらの装備の設計案と武蔵での実地試験の提案書です」

柑奈の言葉を聞きながら提案書に目を通し、長官はそれを置く。

「検討しよう。君たちの意志も」

「ありがとうございます」

踵を返し部屋を出るクルー達を見送った長官と近藤は、扉が閉まるとほぼ同時に息を吐く。

「長官、お聞きしてよろしいでしょうか」

「構わない。なんだね」

「長官は、なぜ武蔵の改装案を提示されたのですか」

「こうなると、思っていたからだ」

「では、長官ご自身もアレには良い印象を持っておられなかったと」

「かもしれない。拡散波動砲試験の事は忘れてはいない」

「そうでしたか……」

「君の用件はそれだけではないだろう」

バレてましたか、とはにかむ近藤。

「ええ。シナノの如月艦長について。彼女は何か思い悩んでいるようでした。彼女にも相談できる人物が必要かと」

「それでは君がやるといい。1時間ほどでシナノから連絡があるだろう」

「自分でよろしいので」

「君があまりにもやりたそうだったのでな」

「それはありがたい限りです。それでは、失礼します」

——シナノ通信室。

「定時連絡です」

『お元気かい？』

「……近藤艦長……!?？」

目の前に現れた姿に驚き、彼女は固まる。

「げ、元気、です……」

『それは良かった。で、連絡は?』

促されて目的を思い出した沙耶は、落ち着いて連絡を述べていく。

『——そうか。初陣ご苦労。生存者は……』

「いませんでした」

『なら、弔ってやらないとな』

「この後に行く予定です。……あの、近藤艦長」

『ん?』

「私はこの戦い、敵の殲滅を命じられませんでした。今回撤退した敵は、私達の戦い方を学んで来ると思います。……私は、間違った指揮をしてしまったのでしょうか」

『俺は間違いだとは思わない。君の境遇を知っていれば尚更だ。だから、自信を持って。艦長が堂々としてないと不安になるだろう?』

「……はい」

『部下に助けてもらおうつもりでいい。艦長つてのはそういうもんだよ』

「私は、近藤艦長のようになれるでしょうか」

『俺を目指すなよ。俺は頼りがいのない艦長だからな。目指すならそうだな……山南さんあたりだろう』

「いえ、私の目標は近藤艦長ですよ」

『それは恥ずかしいな。いつか、有賀と君が……武蔵とシナノが並ぶのを見たいものだ』

「いつになるでしょうか。でも……私も楽しみです。願わくば、それが戦場ではない事を」

そして2人笑い合う。

『困ったことがあるばいつでも頼ってくれ。次の連絡を待つ』

画面の向こうの近藤に敬礼をして、通信を消した。

——艦長らしく、というのを考えすぎたのかもしれない。

そんなことを思い、沙耶は通信室を後にする。

「部下に、助けてもらおう……」

沙耶が彼の言葉を本当の意味で理解するのは、まだ見ぬ未来になるだろう。

少し肩の力を抜いた彼女は、心なしか軽い足取りで部屋へと戻るのであった。

——第3話 「守衛の翼」——

第4話 「盾となりし」

「まもなく、アカシ、アサヒが接舷します」

直後、光学カメラに近づく2隻の姿が映る。

輸送艦をもとに独自改装が加えられた工作艦アカシと、コンゴウ改型をベースとした工作艦アサヒである。

初陣から2日。

地球に向け超空間通信を打電し、寄越されたのが非戦闘艦である事に艦長は今にも文句を垂れそうな表情をしていた。

「まあまあ沙耶、地球にも何か事情があるんだよきつと」

「私、まだ何も言っていないでしょう?」

「目が言ってるよ、こんなもんよこしてって」

夏姫の目は誤魔化せないわね、と沙耶の顔に自然と笑みが浮かぶ。

「アカシには有人損傷艦の解体を、アサヒには無人艦の修理を頼んで。周辺警戒してくれているガミラス艦隊にも交代命令。終わったらみんなも休んでいいわよ」

「了解」

ゆるく敬礼して席に戻った夏姫を見送り、沙耶は艦橋を後にした。

「近藤艦長」

そのまま通信室に入り、地球と回線を繋ぐ。

『怖い顔だ。用件はあれかな、アカシとアサヒの』

「ええ。こちらの通信は——」

『砲艦の増援、だったな。もちろん砲艦の重要性も鑑みて打診したが、派遣できるほどのドレッドノート級も残ってないとの返答だった』

「時間断層でアレほど無駄に作っておいて、ですか？」

『そうだ。俺も不思議に思っただけで工場に足を運んだところ、何とまあ大量にドック入りしていたよ』

「ドック入り？ 時間断層が潰れてから、シナノですらまだメンテナンスは……」

『ああ。どうやらメンテナンスじゃなくて大改装のようだ。全艦、武装と艦橋が外されていた』

「それは……」

『空母にでもする気らしいぞ、ヤツら』

「……機体と、パイロットは」

『無人機も多いだろう』

「銀河の……ですか」

『ああ。次の補給で武蔵にも一機積む事になった』

予想はついていた。

時間断層を使い、不相応に進化した戦術AIがあり、2度の戦争で人口が減ったこの時代でその手を取らないはずがない。

それでも、と沙耶は唇を噛む。

『パイロットも減っていくかもしれん。もしかしたら、アルタイルのパイロットのデー
タも』

「あの艦は、もうなくなりました」

とつさにそう返す。

『とにかく、増援についてはもう一度打診してみよう』

「ありがとうございます」

『たまには休めよ』

通信が切れ、暗転した画面をしばらく眺めていた。

通信室を出て廊下を歩いているところに、呼び出し音が響く。

『艦長、お手数ですが艦橋までお越しいただけますか？』

声を聞けば分かる、夏姫の半ばからかう声だ。

「まったく……」

少し綻んだ顔を帽子で隠し、踵を返してエレベーターに乗る。

エレベーターの扉が開くと、そこには案の定ニヤニヤと笑みを浮かべる夏姫の姿があった。

「なんなの、夏姫」

「実は提案なんだけどさ」

「提案？」

「そ。私たち初陣乗り換えたわけじゃん？」

「そうね」

「だから、ここで艦長……艦隊の指揮官に一言もらえないかなーって」

「……………夏姫」

「ん？」

「私がそういうの苦手なのは知ってるでしょう？」

「よおーく知ってるよ」

「はあ……」

明らかに面白がっている様子の彼女に嘆息し、沙耶は首を横に振る。

「お断りよ。それこそ夏姫がやりなさい」

「それは艦長命令？」

「……いつもより意地が悪いのね」

「あたしも分かってきたって事だよ」

満面の笑みを浮かべる彼女に辟易した態度で嘆息する。

そのまま踵を返そうとすると、夏姫は「あ、そうそう」と続けた。

「全艦に、3時間後にシナノ艦長からメッセーじがありますって送っておいたから」

「……3日間格納庫の清掃を命じます。蓮に認めてもらうまで綺麗に」

「うえ……了解……」

途端に苦虫を噛み潰したような顔になる彼女を振り返りもせず、沙耶はエレベーターに乗り込んだ。

「分かっててどうしてそんな事したんですか？」

沙耶を乗せたエレベーターが動き出すとすぐに尊が振り返る。

「んー、沙耶にはちよつとだけ勇気を出してもらわなくちゃいけないから、かな」

「勇気……？」

「そう。沙耶は少しだけ、戦うのが苦手だから」

「そうは見えませんか……」

「強がつてるだけだよ。それに……沙耶はヤマトを……」

そこまで告げ、夏姫は首を横に振る。

「やっぱいいや。あたしから言わなくたって」

「……?」

思わせぶりに席につく彼女に首を傾げつつ、尊は傍の時計に目をやる。

——3時間後。

「定刻です」

「はじめて」

通信長の工藤の操作により、シナノから僚艦の全てに通信が繋がる。

彼のグーサインを合図に、沙耶は口を開く。

「皆さんはじめまして。シナノ艦長の如月沙耶と言います」

艦橋でそれを聞いていた尊は、漆黒の宇宙を見つめながら耳を傾ける。

『まずは到着すぐの初陣、ご苦労様でした。あなた達のおかげで勝利を収める事ができ

ました。ありがとう』

慣れていないのか、少しぶつきらぼうに放たれた言葉。

しかしどこか、無機質ではないという事は伝わってくる。

『私は、この艦の艦長を拜命する前にある艦に乗っていました。それはアンドロメダ級“6番艦”、アルマイル。ご存知ないかもしれませんが。なぜならこの艦は既に船籍を抹消され、名実ともに存在しない艦になったのですから』

「存在……しない……？」

『波動実験艦「武蔵」と共に旅をしたアルマイルは戦闘で大破、武蔵の考案したトランスワープによって地球に帰還。その後アルマイルは時間断層で建造中の艦へとパーツを供与するため解体、すぐに船籍も存在も消されて、今では6番艦はアマテラスとなりました』

しばしの間を置いて、なおも沙耶の言葉は続く。

『私は、戦うのが苦手です』

尊には不思議と、その声があいつもよりか弱く聞こえた。

『戦えば、誰かの居場所は無くなり、誰かの大切な人の命も消えてしまう。私は、希望を信じてはいない。ヤマトが来れば。ヤマトの遺伝子を。先の戦いではそんな言葉を何度も聞いた。けれど、そんなものは幻想でしかない。この戦場に、「私達がいるところにヤマトはいない」のが現実。ヤマトも、ヤマトのクルーも神じゃない。守れないものだ。だから私は、私の持てる力だけを信じる。あなた達仲間を信じている。地球を守るために同行してくれたガミラスの方々はず、私が全力で守り抜く。地球を母

なる星とする仲間達。命を賭してとは言わない。けれどどうか、地球を守るために力を尽くしてほしい。それが、私があなた達に求める事』

強がっている声には聞こえない、力のこもった声。

指揮をしている時よりもはつきりと、彼女の意思が伝わってくる。

『どれくらいの戦いになるのかは分からない。でも、私は必ず』

』

『敵を、ここより地球には近づけさせるともりはない。本艦隊は地球の盾となり、我が艦シナノが僚艦の盾となる。そして私は、あなた達の盾となる。だからどうか、私に力を』

「気は済んだ？」

演説が終わってから1時間。

バツの悪そうな顔で艦長室の扉を開けた夏姫に、沙耶はあくまで満面の笑みで問いかけた。

「うん、満足」

「そう」

「沙耶の気持ち、きつとみんなに伝わったよ」

「余計なお世話よ」

言いながら、彼女は親友へと紙を突きつける。

「何これ」

「ヤマトでバツ掃除をさせられた人が持っていたスタンプカード。これが溜まるまで懲罰掃除」

「ふうん……うえつ、これ格納庫だけだから全然スタンプたままないじゃん！」

「そりやそうでしょう、ほかの艦まで巻き込んでるんだから」

「うぐ……いや、でもこれはあんまりじゃない!?」

「そんなこと言っているの?」

今度は沙耶が笑いながら、さらに追加のカードをチラつかせる。

その数、10枚ほど。

「いや、やらせる気満々じゃん！ わかった、やるから！ ちゃんとやるから！」

「よろしい」

深いため息をつく夏姫の横顔を見つめ、沙耶は椅子へと腰を下ろした。

明かりの消えた艦橋で1人、ただ宇宙へと意識を溶かす。

「盾……か……」

人をモノのように例える彼女の言葉を反芻する。

「——いや」

——モノのように例えているのは、誰かじゃなく自分だ。

彼女は、自分を艦を動かすパーツとして見ているのかもしれない。

誰かを守るために進んで犠牲になる。

それは美しいが、危険な思想。

「どうしてあの人は、あんな……」

——地球。

「ヤマト級を憎んでいる?」

波動実験艦武蔵の艦長、近藤に呼び出された有賀と柑奈は彼の口から語られたシナノ艦長の過去に唾然としていた。

「じゃああの人は、ヤマトと、武蔵と銀河のせいで大切なものを?」

「結果論だ。ただそこにヤマトが来ず、武蔵がいて、銀河がいたただけだ」

柑奈の言葉に返した近藤は、そのまま視線を天井に向ける。

「だから彼女は、シナノだけは何かを守りきる存在にしたいと願い、自分を盾と言い切ったんだよ」

「1人にできることじゃないですよ、それは」

「ああ。言ったんだがなあ、あの頑固娘は理解できないときた」

「どうして艦長は、如月艦長の事を」

「それは単純だ」

宇宙に浮かぶシナノを浮かべ、そして武蔵がいなかった戦場に思いを馳せる。

そこには銀河がおり、有人、無人を問わないドレッドノート級が白色彗星を押しとどめるために奮戦していた。

アポロノームをはじめとした先遣隊のほとんどは沈み、ヤマトも消えたその戦場で。

近藤の盟友、沙耶の父親は閃光に消えた。

「頼まれたんだよ。娘を頼むとな」

星の瞬く宇宙で、接舷していたアカシを見送ったシナノは艦の明かりを再び灯す。

僚艦の補修が終わるまでその場を動けないシナノはさながら宇宙の灯台のようだった。

アルタイル配属直後に父親と撮った最初で最後の写真。

そこにはもう1人、彼女の大切な人が写っていた。

「……」

日付変更を告げるアラーム音を遠く感じ、彼女は重い目蓋を閉じる。

ひとときの平穩。

それは彼女達の心を洗い流していく――。

――第4話 「盾となりし」――

第5話 「侵略者の名」

——2203年。

「月面で隔離してる奴らの中に怪しい奴は？」

「今んとこはいないな」

武蔵と共に戦い大破したアルタイルは、地球へと帰還する前に月面ドックに入港していた。

波動エンジンと左舷補助エンジン全てを失ったアルタイルが地球大気圏を越えられるかを確認するため、という事のようにだ。

施設内を歩いていていた当時パイロットだった沙耶は、その会話を聞いて足を止めた。

「隔離……？」

どこか引つかかる言葉に、彼女は2人の将校へと歩いていく。

「ご苦労様です」

「そちらこそ。ところで、先程隔離という言葉が聞こえたのですが」

「ああ、ここにはヤマトからシユトラパーゼで預かった11番惑星の避難民を隔離してあるんですよ」

「避難民……」

「同行していたレドラウズ教授がガトランの蘇生体でしてね。その他にも数名が紛れ込んでガミラス艦のエンジンをぶっ壊しまして。もしかしたら、更にもこの中にも紛れてるんじゃないかと」

外壁につけられたモニターには中の様子が映し出されており、沙耶の目は生氣を感じられない少女へと向けられる。

「あんな小さな子まで……」

「今のところ子供が蘇生体になった報告はありませんがね、念のためです。それに」

「それに？」

「そのガミラスの子……イリイって言いましたか、彼女は11番惑星で家族が全滅しているの特に疑いがあるんですよ」

「……そう……」

下げた視線にある艦が飛び込む。

それは壊れていたものの、はつきりそれと分かる造形を留めていた。

「ヤマト……」

「イリイという子の私物みたいです。永倉さんが回収していたのを預かったのはいいんですが、あの子とまともに話せず返せずじまいで」

「……ちよつと、話してきてもいいですか？」

「んえ？ あ、ああ……」

「返してきます」

ヤマトの模型を手に、深呼吸の後で扉を開ける。

——大丈夫、夏姫に教えてもらったとおり。

「何かありましたか？」

閉じた扉と互いを見る将校に話しかけたのは、アルタイムに勤務するもう一人の女性。

「……沙耶？」

モニターに映る中の様子を見て名前を呼ぶ。

「お知り合いですか？」

「はい。うちのフネの航空隊副隊長です。彼女、どうして中に？」

「避難民を隔離していると言いました、そのガミラスの女の子の話をしたら中に」

「……そうですか……」

頑張れ、沙耶。

少し成長した彼女の姿に微笑み、夏姫はその場を後にした。

自分に近づくと足音を感じ、彼女は視線を上げた。

隣に来てしやがみ込む笑顔の女性から少し距離を取り、じっと見つめる。

「こんにちは」

「……こんにちは……」

「ヤマトに乗ったのよね。どうだった？ ヤマトは」

「みんなを助けてくれたの。たいちよーさんや、みんな……」

「うん」

「あのね、わたしヤマトが来ればみんなを助けてくれるって思つて外に出たの」

ヤマトの名を出すと、イリイの顔は次第に明るくなつていった。

「お兄ちゃんが言つてたから。ヤマトがくれば、あんな奴らすぐにやつつけちゃうつて

だから」

「みんなを助けて欲しいつて、言いに行つたの？」

「……うん。たいちよーさんに聞いたら、『ヤマトは必ず来る』つて言つたの。そしたら、

本当に来てくれたの！ 空からばあーつて！」

両手を広げ、恐らくワープアウトの様子を表すであろう手振りを見せる。

想像はつく。

その姿を見た彼女が、どんな気持ちでヤマトを見続けたのか。
ヤマトに、どんな感情を抱いたのか。

「ねえ、お姉ちゃん」

「なに？」

「ヤマトは、今どこにいるの？」

「……ヤマトは今、遠い星で困ってる人を助けて、地球を守るために戻ってきてるの」
「本当？　じゃあまたみんなを助けてくれる？」

「ええ。だから」

沙耶は優しい笑みで後ろ手に隠したヤマトの模型を差し出す。

「ヤマトを信じて。希望を忘れないでね」

「……うん！」

臉に残るその笑顔はとても眩しくて。

忘れかけていたものを思い出させるようだった――。

——そして、2204年。

目を開くと、艦橋のモニターには現在の敵味方の座標が記されていた。

突入したガミラス艦隊の巡洋艦が敵を攪乱し、そこに航空機が急襲をかける。

更にその外周からは主力戦艦が艦砲射撃と共に包囲を整え、戦力を決り取る。

——ヤマトにだって、救えないものはあったのに。

「第一次攻撃隊は後退せよ。ガミラス艦も退避、無人艦は前進し穴を埋めて」

遠くで一際大きく光る爆発の中に、古く懐かしい記憶が浮かぶ。

——私達は人間だから。

「敵艦隊、約半数を撃破。対して本艦隊損耗率はまだ1割以下です」

「敵艦隊に退路を解放。包囲解除。撤退を促して」

モニターには、敵艦隊の後方を開けて前へと回る様子が映し出される。

沙耶は幾度となく襲いくる艦隊を殲滅することなく、撤退を促してきた。

あの星には戦力が十分にあると伝えさせるために。

しかし今のところ、その効果は現れている様子はない。

「敵艦隊、撤退していきます」

「追撃はしない。軽微でも損傷のある艦は即座に後退。全機帰投」

なんてことはない。いつもの戦闘。

しかし。

「本艦所属第二編隊より入電あり。撃沈した敵艦から投げ出された兵を目視。損傷なし、生体反応検知。船外服と思われる衣類を着装しています」

「生存者……!?」

夏姫の声に目を見開く。

「まさか……シーガル、医務科のクルー3名を乗せてできる限り速く発艦せよ。第二編隊は生存者の保護を。無人艦を接近させて、保護の後容体に変調あれば無人艦にて待機！」

思わず立ち上がり指示を出した沙耶は、そのまま力を抜いて座り込む。

——まさか、生存者が……。

独房の扉の前で、深く、長く息を吐き出す。

あれから2日。

生存者の青年は独房の中で意識を取り戻した。

その知らせを受けて、艦長の沙耶自ら彼と話すために出向いている。

「こんにちは」

青年は沙耶を一瞥すると、すぐに壁を見つめた。

——まあ、そうよね。

彼女の首にはガミラスから借り受けた翻訳装置がつけられ、敵から傍受した言語資料からリアルタイムで情報が更新されている。

沙耶が放った挨拶の言葉は、間違いなく彼に届いているようだった。「ちよつと話さない?」

半ば強引に彼の前に座り、じつと待つ。

腰の銃は部屋の外に置いてきた。

手袋と帽子も外し、艦長に渡されているコートも脱いだである。

極力、威圧感を与えないように。

「故郷はどんな星?」

「……」

「貴方は——」

「敵に話すことはない」

「……そうね。でも、私は貴方達を敵だとは思ってない」

「夢物語だ」

「いつか、それが叶う日が来ると信じてる」

「……」

再び黙り込む。

しかし、彼の目は先程と違って人間らしさを宿していた。

「(イイ)、寒くない?」

「故郷より暖かい」

「よかった。身体は？」

「なんともない」

「そう。……なら、近いうちに貴方を帰さないかね」

そう言つて立ち上がった沙耶に、青年は呼び掛けた。

「お前たちの言葉で、お前たちの星はなんて言うんだ」

「地球よ。私達の故郷」

「……我々の星は、ボラーという」

「ありがとう。必ず、私達が貴方を仲間の元に帰すわ」

——1週間後。

イスカンダルへ向かう旅路で、ヤマトがメルダにそうしたように、青年には1週間分の食料と鹵獲したボラーの機体を譲渡しシナノの第3格納庫から解放した。

「あの人が私達の事を話すとは考えてなかった？」

「あの人の会話で、私はこの艦隊の戦力を話していない。だから大丈夫よ」

「そっか」

艦長席の近くでその光を見送っていた夏姫の問いに答え、沙耶は視線を戻した。

「なんか、戦いにくいんです」

尊の言葉に頷く。

「ええ、私もよ」

「どうして助けたんです？」

「敵でも、命に変わりはない。助けたかったから助けた。それだけよ。ああ、でも……」

天井を見上げて、ただ吐き捨てるように。

「負けた艦隊から生還した人があの星でどうなるか、聞かなかったわね」

もしガトランティスのように、負けた艦隊に待っているのがただ滅びだったとしても。

——私達のエゴだとしても。

——救えなかった後悔だけは、したくなかった。

星の海に佇む艦に近づくと僚艦を受け入れ、シナノはエンジンを止めた。

願わくば、あの青年に戦場で敵として再会することがないようにと。

そんな沙耶の願いは叶うだろう。

ただ、青年に生きてほしいという願いは恐らく——。

それを知る者は、地球にはいない。

— 第5話 「侵略者の名」 —

第6話 「旗艦突貫」

「本艦前方、距離5万にワープアウト反応。数20」

「全艦戦闘配備。各艦、陣形アルファで対応せよ」

シナノ両翼から前進してきたガミラス艦隊と、その後方に追従する4隻のドレッドノート級が陣形を整える。

「2隻に拡散波動砲の用意を。発射予定は30分後、全巻に通達。作戦開始」

ガミラスの巡洋艦が加速する光を送り、シナノは甲板から艦載機の射出をはじめた。

光の尾を引いて戦火へ飛び込んだ機体は、一撃離脱で敵艦を着実に追い詰めていく。

「今回も楽勝ですな隊長」

「かもな」

そんな通信が流れるほど、彼らは戦いに慣れ始めていた。

——しかし。

「本艦後方に重力場の歪みを検知！ 更に敵艦隊後方に大きな歪みが発生……ワープアウト反応です！」

レーダーに増えていく敵を示す光点。

「数は」

「総数10、正面の艦隊後方には大型の艦もいます」

シナノへ迫る敵は砲撃を始め、艦底に穴を開ける。

「波動砲発射中止、2艦を本艦の護衛に回し、残りの2隻でガミラス艦隊の後退を援護！

ガミラス艦隊へ後退命令。転舵反転、全砲門、発射口開け！」

煙を引きながら艦体を振り回したシナノは、艦橋前部につけられた砲身で敵を捉える。

「撃ち方はじめー！」

青い光を纏い突き進む陽電子の束。

それは敵艦の装甲を突き抜け爆炎を上げるが、撃沈には至らず。

続いて敵へと突き刺さった魚雷とミサイルがようやく敵を葬り去る。

反転し、前進しながら主砲の一撃で敵を沈める無人艦。

波動防壁を展開していることよって多少威力が落ちているとはいえ、戦艦の大口径砲の破壊力は強大に見えた。

——武蔵とアルタイルがいた時は、そうは思わなかったのに。

そう思ったのも束の間、入電を示す音が鳴り響く。

「艦長、ガミラス側から作戦が具申されました。どうしますか」

「回して」

爆炎と弾幕の光に包まれる艦橋で、モニターに映る作戦内容に目を通す。

——これだとダメね。

「ガミラス艦へ打電。後退しつつ応戦、シナノは構わず自艦隊の防衛に努めて。無人艦は引き続き、本艦とガミラス艦隊の防衛を」

無人艦2隻が放つ対艦グレネードと艦橋砲、シナノの魚雷管から放たれた融合弾の光球を目眩しにして敵艦隊の只中に飛び込む艦載機。

レーダーで見える限り、ガミラス艦隊は作戦が棄却された事に対する不満はあれど命令に従い後退、陣形を整えて応戦しているようであった。

敵の数は徐々に減りつつある。

しかし。

——ここで散開して攻勢に回っても、間に入り込まれたら……。

そんな考えが過ぎる。

「くそ、旗艦さえ倒せれば撤退させられるかもしれないのに……！」

戦術長がそんなことを呟く。

そう、旗艦さえ倒せれば。

「……………旗艦さえ……………」

考え込む。

旗艦さえ倒せれば、全滅はさせられないまでも撤退に持ち込める可能性は高まる。

「よし……………全艦に命令打電!」

「全艦……………」

「ええ。本艦は只今より回頭、敵旗艦への攻撃を敢行する。ガミラス艦隊のうち、ケルカピア級2隻は本艦と同行、メルトリア級とゲルバデス級は回頭し後方の敵に対応せよ。その他の艦は本艦の援護を、無人艦隊は自動ロツクでの砲撃を続行、波動防壁展開……………作戦開始!」

艦のスラストを開いてその場で180度旋回したシナノは、波動エンジンを全開にしてガミラス艦隊の下へと潜り込んだ。

それを見たメルトリア級とゲルバデス級は砲塔を指向させつつ、シナノの上を通過して後方へと回る。

下から顔を出したシナノの左右についたケルカピア級は、シナノ前方の主砲塔の代わりとして砲撃を行う。

「ガイペロン級へ、突入部隊援護のため艦載機を爆装して出撃。ゲルバデス級は本艦の代わりに指揮を任せる。以上」

飛行甲板を蹴ったスヌーカの編隊をリーダーで確認し、沙耶は航海長へと指示を飛ばす。

「最大速度で敵旗艦へと肉薄！ 戦術長、ロケットアンカー、近接戦闘用意！」

「了解、ロケットアンカーの投射システムを武装システムへリンク、パルスレーザーの威力を最大出力へ！」

「機関最大速度！」

「任せな、行くよ！」

シナノから離れ、道を開くケルカピア級の中央を、光を纏った巨艦が通り過ぎる。

ゆっくり、大きく旋回しながら巨艦に近づく。

迎撃の砲火は置き去りにされ、シナノはそのまま敵の脇を通り抜ける。

「ロケットアンカー射出、機関停止！」

「ロケットアンカー、射出！」

シナノの左舷から分離した錨が敵の装甲を貫き、シナノをそこに繋ぎ止める。

——ヤマトの戦術に做えば……パルスレーザーの砲門数が多いこちらが有利のはず

……。

「戦術長」

「はい」

「敵艦の艦橋を狙って。確実に無力化したい」

「……………了解」

巻き取られる錨。

砲身を持ち上げた無数のパルスレーザーは、艦が回り込むと同時に光る艦橋の窓へと向く。

「撃て」

シナノが纏う赤い矢は装甲に弾かれながら徐々に命中点を上げて、遂に艦橋の窓を貫き炎に包む。

「ロケットアンカー解除、砲撃はじめ！」

装甲から離れた錨は、敵艦へと衝突し装甲を抉りながらシナノへと戻っていく。

燃える艦橋を貫いた陽電子砲と、至近距離から装甲を撃ち抜くミサイル、魚雷が艦を火の海へと変えていた。

「離脱、最大戦速！」

艦の加速に置いて行かれた錨が艦橋を薙ぎ倒し、破口から噴き出す爆炎が艦を包み込む。

「残存艦は？」

爆発を背に戻るシナノのレーダーには、まだ数多の光点が表示されていた。

「味方艦に損失は無し、敵艦残存率67%」

「そう……良かった」

「敵艦隊、撤退を始めます」

「全艦に通達、撤退する敵艦の追撃は必要ない。各艦損害を確認されたし」

艦隊を引き連れて補給場所へと帰還したシナノにアカシが接舷する。

同時に、地球から地球、ガミラス双方の食糧補給のために新造された補給艦、マミヤが合流していた。

「武蔵が出撃した？」

『ええ。単艦での探索任務です』

「どちらへ？」

『大マゼランだそうです。期間は2年間、アケーリアス文明の……もう一つの方舟の探索、とか』

「そうですか……」

しばしの沈黙。

そして、沙耶は再び口を開く。

「武蔵単艦との事ですが、装備は」

『艦首波動砲が観測装置に換装されたほかは、佐伯技師長の試作装備を搭載したとの事です』

「それだけ……?」

『いえ。他にはガトランティス戦時に武蔵へ仮編入していたアルタイルの部隊が、正式に武蔵所属になっています』

「……そう……」

『もう艦もありませんから……』

「そうね。名前すら残っていないもの」

『……失礼しました』

彼の顔は、つい今しがた彼女が元アルタイル所属だと気づいたことを物語っていた。

「良いのですよ。事実ですから」

『お心遣い、感謝いたします』

頭を下げると、彼は『ああ、それと』と付け足した。

『近藤艦長も、貴女の事は気にかけておりました』

「ありがとうございます。では、こちらからの報告を」

『お願いします』

数十分後、通信室から出た沙耶の耳に艦内放送が飛び込んできた。

『艦長、至急艦橋へとお願ひします。ガミラス艦が接舷許可を求めてきています』
「接舷許可……?」

首をかしげ、沙耶は艦隊へと駆け出した。

「どうしたの?」

開いた扉から通信席へ向かうと、ゲルバデス級の艦長からの電文が届いていた。

それも、山のように。

「いつから?」

「本艦へのマミヤの補給が終わってからです。艦長は通信中でしたが」

「どうする、沙耶」

夏姫の言葉に笑顔を見せ、沙耶は返答を打ち込む。

「許可します。客人には丁重にね」

直後、沙耶は艦橋にいる面子へと目を配る。

「ガミラス艦の接舷に備え。夏姫、蓮、それと戦術長、技師長は後で応接室に来て。以上」

エレベーターに乗り込んだ彼女は、制服の襟を正して深く息を吸い込む。

——大丈夫。

扉が開いた時、彼女の瞳はまっすぐ前を見つめていた。

——第6話 「旗艦突貫」 ——

第7話 「地球とガミラス」

——夢を見る。

それは白い霧へと消えていく、あの人の記憶。

手を伸ばしても、足を踏み出しても、どれだけ叫ぼうと。もう届かない、届くことのない、永遠の彼方。

あの時から。

あの日からずっと……止まったまま。

「抗議……ですか？」

ガミラスからの使者を座らせた沙耶は、極めて冷静に問う。

「ええ。我々が問いたいことは二つ。一つは、我々の作戦を無視したこと。もう一つは、旗艦でありながら指揮を放棄し突貫したこと」

「でしようね」

予想はできていた、というように嘆息すると、沙耶はまっすぐ彼を見据える。

「任務を始める際、私は、本艦と私があなた達の盾になると言いました。それだけでは理

由になりませんか」

「なりませんね。旗艦の……いえ、〃貴官の〃存在意義を貴女は履き違えている」

「……〃貴艦〃……？」

首を傾げる。

ガミラスの翻訳機で日本語のイントネーションによる異議語を使えるのかという疑問もさることながら、沙耶にはその真意が分かりかねた。

「貴女は、自らとシナノを我らの盾だと言いつつ。あの演説は素晴らしい。だからこそ、我々は——」

「あなた方は、ガトランティスとの戦いで多くの人を失った地球人類の代わりに戦ってくれている。私達は、心からあなた達を頼りにしています。そして我々の義務は、〃たとえ命に変えても、部下達を生き返すこと〃なのです」

失礼します、と一言添えて沙耶は席を立つ。

「あつ、沙耶！」

夏姫は彼女が出て行った扉と客人を交互に見て、頭を下げる。

「ごめん、後はよろしく！」

「は、はい！」

駆けていく彼女の背中を見ていた尊は、脇に感じる衝撃に振り向いた。

「返事したからにはしっかりとやりやるんだよ、戦術長」

「いえ、ここは機関長が」

「うちはキミだと思うよ。みんなも」

頷く彼らを見て息を吐いた尊は、自らよりも高官なのは明らかかな異郷の仲間に向かって頭を下げる。

「失礼致しました。僭越ながら、ここからは僕が」

「ええ、喜んで」

「沙耶、待って！」

廊下でようやく親友の腕を掴んだ夏姫は、振り払おうとする彼女をそのまま壁に追いやる。

「どうしたの、らしくないよ」

「そんなこと無いわ」

「ううん。沙耶はいつも、しっかりとした答えを出すから。あんな受け答えはしないはずだよ」

「……そう……なの？」

「沙耶。前から気になってた事があるの」

夏姫の声色の変化は彼女にも分かった。

その目は真剣で、目を逸らしたらいけないという威圧感すら含んでいる。

「アルタイルを降りてから、沙耶はずっと自分を蔑ろにしてる。どうして?」

「夏姫には……」

「ちゃんと答えてっ!」

肩を掴む力が強い。

ただそれだけで、普段の彼女とは違うと実感する。

「私はもう、誰も失いたくないだけ」

「それは、あの人のこと?」

「ええ。そんな気持ちを持つのはもう嫌なもの」

「だから、沙耶は」

「私は死んでも構わない。それで守れるなら」

「何を言ってるの……そんな事して、みんなは!」

「私のせいで部下を死なせることは、何よりもあつてはならないことなの!」

「分かるけど、沙耶を失ったらみんなが悲しむんだよ!!?」

「もしそうだったら、私の事なんてすぐに忘れて」

「……ッ!」

廊下に破裂音のようなものが響き渡る。

「ふざけないで……」

目尻に涙を浮かべたまま、夏姫は遠くへと走り去っていく。

ただ痛む頬を手で押さえ、ただそこで立ち尽くす。

——どうして、分かってくれないの。

——同刻、応接室。

「すみません、艦長もきつと、あなた達の言葉は理解していると思うんです」

尊の言葉に彼は柔らかい笑みで頷く。

「分かっています。我らも彼女と同じ気持ちですから」

「同じ?」

「ええ。この艦隊に志願した我々は、命を賭してもシナノを守ることが使命だと考えているのです」

予想外の言葉に目を見合わせる。

同時に、抗議文がまとめられたものではなくそれぞれの艦からの直接入電であった事に合点がいった。

「あなた方は、月面の大使館から指名されたのでは……」

「大使館から話があったのは事実です。しかし、それはあくまで志願兵の募集でした。いなあ困りましたよ、駆逐艦のクルーも行かせると聞かなかったもので」

「……そうなんですか……」

疑うわけではない。彼の目を見ればそれが全て事実なのは明白だ。

それでも。

これだけは聞かねばなるまいと、尊は更に言葉を重ねる。

「あの、どうしてそこまで」

「これは地球への恩返しと、我々の贖罪なのです」

「恩返しと、贖罪」

「今地球にいるガミラス人の半数以上は本土からの移住者です。我々もまた然り。そして我々は、ヤマトを敵とし戦おうとしてきた」

「戦争ですから」

「私がヤマトをこの目で見たのはガミラス本土での事です。その時のヤマトの戦い方を見て、私は震えました」

天を仰いで思い出すように目を閉じた彼は、興奮混じりで続ける。

「あの艦の、なんと気高いことか。敵の本星を前に民を滅ぼすこともせず、被害を最小に止めるために艦だけを撃ち抜き続けた。そして」

今彼の目には何が写っているのか、シナノのクルーには分かるまい。

彼らはヤマトが、遠いマゼランで何を為したのかを知らないのだから。

彼らが知るのは、ヤマトがガミラスと和平を結び、イスカンダルからコスモリバーを受取ったという結果だけ。

ガトランティスとの戦いでヤマトが孤独な戦いをしたのも、彼らが戦地で見る事はなかった。

戦場でのヤマトを聞くのは、これが初めてなのだ。

「——そしてあの艦は、目の前で我々を救ってみせた」

ヤマトを語る彼は、満足げに微笑む。

「あの光はとても……美しかった。無論あれが道中、我々の仲間を葬ってきたのは分かる。だが少なくとも、あの時放たれた青い光はただ我々を救うためのものだったはずだ。あれを人は、英雄と呼ぶのかもしれない」

「ヤマト……ですか……」

「我々の中には、バランでヤマトと会敵した者もいる。だが彼らでさえ、ヤマトは我々の滅びを望んでいなかったと話しているよ。その時我々は決めたのだ。『せめて、あの時救ってくれたヤマトに恥じない軍人でいるのだ』と」

「それが、恩返し」

「ええ。我々はヤマトに救われた。だから今度は我々の全力を賭して地球を守らせてもらおう。そのチャンスを与えられた事を嬉しく思うよ」

「しかし、それはガトランティスから地球を守るため共に立ち上がってくれた事で既に」「ありがたい言葉だ。だが、真に地球を救ったのはヤマトと地球の方々だ。我々はまだ、守れてはいない。それにもう一つ、我々には贖罪がある」

今度は一転、尊達をまっすぐ見つめる。

「我々ガミラスは、君たちの星を侵略してしまった。この罪は、我々の一生をかけて地球を守る事でしか贖えない」

「いえ、そんな……」

「たとえデスラー総統の命であろうと、この星を侵略したのがザルツ人の部隊であったとしても、ガミラスが侵略したのは事実だ」

「しかし、戦端を開いたのは地球でした。結局は……」

尊が言葉に詰まったのを見て、後ろから機関長が「ちよつとよろしいですか」と声をかける。

「贖罪はともかく、ヤマトに救われたことから、どうしてシナノとうちらを守ることになるんです？」

「シナノはヤマトの同型艦だ。それに、これは私個人の感情でもある。私は、最初に聞い

た艦長の演説に、ヤマトと同じ気高さを感じた。演説だけじゃない、いるかもしれないという生存者のために命をかけるその姿に、私は惹かれた。この艦を無くしてはならない。この艦のクルーを守らねばなるまいと

「それは、うちの艦長とうちらに——」

「可能性があると信じたのだ。だから、守らせてほしい。この艦を」

そう言って、彼は頭を下げた。

「僕たちも、信じています。あなた達を」

尊が差し出した手と握手を交わした彼は、どこか満足げに笑っていた。

その後のこと。

「抗議って言うから何かと思ったら……」

「まあ良かったじゃんか、艦隊を離れるとか言われなくて」

「いてっ」

勢いよく背中を叩かれた尊が振り向くと、蓮がニヒヒと笑っていた。

「ちよつとは成長したかな、戦術長」

「茶化すなよ朱音」

「うるさい、直輝こそ何もしなかったくせに」

「それは朱音もじゃなくてか？」

「う……とにかく、私は艦橋に戻ります。艦長への報告は戦術長が？」

「あの後ガミラスの方と話したのは僕ですし、多分僕が……」

「じゃあ、後はよろしく」

手をひらひらと振ってその場を後にする一同を見送り、尊は一つため息をつく。

「はあ……」

落胆した気持ちを鼓舞するように頬を叩き、彼もまた一步を踏み出したのだった。

外から聞こえたノックの音に意識を引き戻され、咄嗟に応える。

「何？」

「戦術長、御上尊です」

少し緊張した声に微笑む。

「入って」

「失礼します」

「御上くん、コーヒーとお茶はどっちが好き？」

「えっ……あ……苦くなければ、コーヒー、です」

「分かったわ。そこに座ってて」

少し広い艦長室は、ヤマトとは異なり艦内の中腹に入っている。

シナノの艦橋最上階は航空機の飛行甲板への発着管制塔になっているからである。

おとなしく座る彼にミルク多めのコーヒーを出すと、自分が入れたままのコーヒーに口をつける。

「ありがとうございます……」

「緊張しないで。ここはプライベートだから」

「は、はあ……」

やっぱり、彼にとつて自分は怖い上官なのかと内心落胆しつつ、沙耶は夏姫にそうするよう語りかける。

「ごめんなさい、勝手に抜けたりして」

「いえ、ガミラスの方も、理解してくれていました」

「そう……後でみんなにも謝らないとね。もちろん先方にも」

「ガミラスの艦隊は、変わらずシナノについてくれるそうです。守らせてほしいって、逆に頼まりました」

「どんな話をしていたのか、詳しく聞かせて？」

それからしばらく尊は事細かに説明をしてくれた。

ヤマトの事と、ガミラスの贖罪について。

そして、シナノに思っている事も。

「——以上です」

「ありがとう」

「……あの、艦長」

「ん？」

「聞いてもいいですか」

「もちろん」

沙耶と向かい合った尊は、まっすぐ彼女を見る。

「艦長は、戦うのはお嫌いですか」

「……あなたは？」

「僕は……あまり好きではないです」

「私も同じ。本当は戦いたくないわ」

「なんとなく、そうじゃないかと思ってました。艦長が敵の殲滅を望んだ事は一度もな

いからです」

「御上くんなら分かってくれると思ってた」

柔らかな微笑む彼女に、気づけば尊も微笑み返していた。

「あの、艦長」

「また質問？」

「艦長は、どうして戦っているんですか」

カップを置いて、小さく息を吐く。

「そうね……」

天井を仰ぎ見る彼女の目は遠い昔を見るようで。

どこか優しく、どこか痛々しい。

いつしか、その瞳に引き込まれていた。

接舷していたガミラス艦はシナノを離れ、ほかの艦と合流したようだった。

星の海は、今日も凧いでいる。

——第7話 「地球とガミラス」——

第8話 「届かぬ願い」

——西暦2203年。

「土星に？」

「ああ。ヤマトからガトランティスがこっちに来てるつて報告があつてな」

「そう……」

「俺は新造の小型艦勤務だから、きつと大丈夫。沙耶こそ、空母に乗るんだからしつかりしろよ」

「分かつてる。それより」

夕暮れの埠頭で顔を見合わせる。

少し顔を赤らめた彼女は、夕陽に薬指の指輪を輝かせた。

「約束、忘れないで」

「もちろん。まあ大丈夫だろ、ヤマトも向かつてるんだ。なんとかなるさ」

彼の樂觀的な思考は、いつも彼女を安心させていた。

「地球で会おうね」

「ああ」

暗くなつていく基地に身体を溶かす彼を見送り、左手を握りしめる。彼女にはもう、母がいない。

母親は遊星爆弾症候群で亡くなり、父と2人暮らし。

その父も今は地球防衛のために宇宙に出ている。

勤務中に会つた彼とは、もう婚約まで済ませていた。

「沙耶！」

「夏姫、いつから？」

「ついさっき」

背後から駆けてきた親友に笑いかけ、陽が沈んだ海を見つめる。

「彼は行つたの？」

「……うん」

「待つのは辛いね」

本来なら恋愛ごとに関心などなかった沙耶だったが、彼との婚約に関しては夏姫の暗躍があつたという。

沙耶にとって彼女は良い相談相手だった。

そして2人は、同じ艦の勤務となつた。

アンドロメダ級、アルタイル。

空母型アンドロメダ級の一隻であるアルタイルの任務は、波動実験艦武蔵と共に移住可能と思われる惑星の探査へと向かう事。

ごく短期間の任務であり、武蔵の他はラボラトリーアクエリアスが別動隊として同様の任務に就くことが伝えられていた。

「私達も明日は月に行くんだから、夏姫は寝坊しないのよ」

「そんないつも寝坊なんかしないってば!」

「訓練学校で何回遅刻したんだったかなあ?」

「アレは……半分は寝坊じゃないし……」

「まあいいけど。一緒の便だから、返信無かったら起こしに行つてあげる」

それから、彼女達は宇宙へと旅立った。

夏姫はアルタイルの管制官として、沙耶は艦載機パイロットとして。

短い間ではあったものの、沙耶はそこで知つたのだ。

——自分には無い、艦長の、指揮官の資質を。

きつと自分には無理なのだろう。

そう思いながら、彼女は戦場を駆けた。

武蔵が多くを救う中、彼女には無力感だけが募っていくばかり。

味方の機体を守ることはできず、母艦も大破し、武蔵への移乗も叶わなかった。

アルタイルが廃艦になり、籍ごと抹消された事を知ったのはすぐ後である。

「沙耶、最近元氣ない？」

「そんな事は……」

「仕方ないよ。アルタイルは名前も、艦も何もかも奪われたんだから」

「あそこまで大破した艦は、直す事はできないから」

「でも、アンドロメダ級は量産前提の艦なんだし、パーツ交換とかで」

「無理よ。エンジンが丸ごと壊れているんじゃないわ」

どこか冷めた声で言い放つ彼女は、何かを諦めているようであった。

「もう新型の艦長に内定しているのに、そんなので大丈夫なの？」

「なりたくてなったわけじゃないのよ。どうして私なのか、私が問いただいたいくらい」

何気なく取り出した携帯端末には、少し前に受信したメッセージが表示されていた。

『艦長に内定したって！ おめでどう』

——何もめでたくないわ。貴方がなった方がきつと良い。

返信を送るが、彼に届くのは数日後だろう。

彼は今、遠い土星にいるのだから。

「超大型のワープアウト反応ありー」

星を、宇宙を喰うような彗星が現れる。

彗星の殻を破り現れたカラクルム級の攻撃により、味方艦は瞬く間に撃沈されていた。

アンドロメダ率いる地球艦隊が時間断層で作られた無尽蔵の戦力を投入した事で、その戦いは泥沼を極める事となる。

波動砲による破壊、ガトランティスの攻撃による破壊。

「これの何が違うっていうんだ……」

飛び交う破壊兵器の光線の光を受け、そんな悩みは吹き飛ばす。

迷えば死ぬ。

そう奮い立たせて前を見据えた刹那――

――やっぱり俺は。

『俺はきつと、艦長にはなれないよ』

返信。

ニユースでは、土星でガトランティスと会敵したという情報が流れていた。

「今送っても届かないかもね」

「そうね……」

祈るように目を閉じ、端末を切る。

遠い景色、遠い音に混じって聞き慣れない音が響いた。

窓から外を見ると、見慣れた艦形が空をいくのが飛び込む。

「……武蔵……いや」

それは共に旅をしてきた艦と似ていたが、それとは異なる。

艦体を開いた窓から漏れる光がその異様さを物語っていた。

「あんな艦……まだ残ってたのね」

時間断層から湧き出てきたドレッドノート級を引き連れて闇夜に消えていく背を見

つめていると、再び端末が震えた。

『緊急呼集』

もしかしたら、という予感が脳裏をよぎる。

「夏姫、緊急呼集よ」

「うえ？ 人使い荒いんだから……」

「ぼやいてないで、準備して」

「はい」

呑気な返事をする彼女に、自分の予感を伝えることはできなかった。

これが杞憂であつてくれたなら。

そんなほのかな願いは、すぐに潰えた。

火星を最終防衛ラインとして、残された艦隊を投入して対抗する。

その準備が整うまでは波動実験艦銀河が率いる艦隊によつて時間を稼ぎ、時間断層で新しく建造された艦は随時投入される、という説明が為された。

しかし、それよりも気にかかる事はその前に発せられた言葉。

「すみません」

退室しようとする官僚を呼び止める。

「どうした」

「作戦と直接の関わりはありませんが、お聞きしたい事があります」

「聞こう」

「土星守備艦隊が壊滅したというのは、事実ですか」

「ああ。それと、銀河が到着した時点で地球から増援に行つた主力艦隊も残りわずかだったそうだ」

「そうですか……」

「……名前は？」

「如月沙耶です」

「……そうか。すまない、君の父上が乗っていた艦も……」
「分かつています」

対峙した高官は彼女の指に輝くものを見る。

「ヤマトも、銀河も間に合わなかったんだ。すまん」

それだけを言い残して彼はその部屋を後にした。

「沙耶」

「……夏姫……」

「今日はもう帰ろっか」

「……」

この日、彼女は。

「——私は、独りになった」

ひとしきり語り終えた彼女は、尊に向かって微笑む。

「だから、私はせめて手の届く範囲の人は守ろうと思った。ただそれだけのことよ」

「そんな事が……」

ちらりと見る彼女の左手には、話に出てきた指輪がない。

沙耶はそれに気付いて席を立つ。

「彼がいなくなつて、もう必要がなくなつたけれど」

部屋の一角にある机の引き出しを開けると、小さなケースを取り出した。

「どうしても捨てられなくて、まだこうして。呆れた？」

「いえ。まだ僕には分かりませんけど……」

「分からなくてもいい。私と同じ思いをさせないために、私は戦つてるんだから」

「……あの、船務長とは」

「夏姫はあの日から家を出て、私と一緒にいてくれてるわ。止めたのだけど聞かなくて」

困つたものね、と彼女は笑う。

「艦長は船務長の事を大切に思っているんですよね」

「本当はみんな、つて言うべきでしょうけど」

「いいんです。でも、これだけはわかってください。船務長も艦長と同じ気持ちだと思います。だからこそ、恐らく艦長の考えには賛同できない」

「……？」

立ち上がり彼女と目を合わせた尊は微笑みながら告げる。

「艦長が船務長を思うように、船務長が、僕たちが艦長を思っているからです。僕たちのために艦長が死んでいいと思っている人はいない」

敬礼をして「僕は通常シフトがありますので」と扉に手をかける。

「少しでいいので、覚えておいてください」

その言葉とともに扉を閉める。

「……貴方に教えられるなんて」

どこか満足そうな笑みを浮かべた沙耶は、そのまま部屋を出て廊下を歩く。

目的の部屋の前には見慣れた顔が腕を組んで立っていた。

「教えられたかい？」

「ええ。あなたが差し向けたの？」

「失礼言わない。うちは何にもしてないから」

「そう……ありがとう、蓮」

「ごゆっくり」

ひらひらと手を振って立ち去る背中を横目に、沙耶は扉のロックを開けた。

第一艦橋のエレベーターを出ると、いつもよりむず痒い感覚がした。

「僕に何か？」

それに耐えかねて尊が声を出す。

「どうだった、艦長は」

光洋が振り向き、それに合わせて全員の視線が集まる。

「どうって……いつも通りだけど」

「本当か？」

「ん……ああ、でも普段よりは柔らかかったかも」

「あの艦長にもそんな時があるとはなあ」

「光洋は艦長の事なんだと思ってるんだよ……色々話したよ。そのあとどうなったかは分かんないけど」

「そっかー」

直後、開いた扉から声が響いた。

「戦術長、いい仕事だった！」

はっはっは！…と快活に笑う蓮は席の肘置きに腰をかける。

「結局見張ってたんですか……」

「見張ってたわけじゃない。ただ夏姫の部屋の前にいただけさ」

「ほぼ同じじゃないですか」

「同じとは失礼な。夏姫とは話してないよ」

「より悪質では」

「うっせ。……やめろ。やめろって、みんなそんな目でこつち見んな」

「……」

「う……はいはい、なんて声かけたらいいか分からなかったうちが悪うございましたよ」
さつきまでの自信はどこへやら、彼女は肩を窄めて席に座り直す。

「みんないるわね」

直後、エレベーターから沙耶と夏姫が顔を見せる。

「迷惑をかけてしまったわね。ごめんなさい」

「いえ。艦長、ガミラスは」

「そこもさつき話をつけてきたわ。それと、先程地球からも増援があると連絡が」

沙耶が戦術長に答えた直後、シナノの眼前に2隻の艦がワープアウトした。

回頭しシナノに艦首を向ける2隻は、エンジンや波動砲の形状からドレッドノート級である事が分かる。

「実地試験を兼ねて本日より作戦に参加する、主力戦艦改装型の宇宙空母よ」

2隻は長大な飛行甲板を持つという特徴があるものの、シルエットが著しく異なっていた。

片方は、ドレッドノートの後ろ半分を飛行甲板と格納庫設備に付け替えたような形状。
もう片方は、主砲と艦橋を右舷に寄せ、左舷にアングルドデッキを備えた飛行甲板を

艦中央に持つ。

「形が違う……」

「言ったでしょう？ 実地試験なの。地球側でも決めあぐねているみたいだから、両方作って送ってきたのよ」

「時間断層で大量に作ったからってそんな雑に……」

「同感。でも、もう来てしまったものは使うしかないわ。ガミラスと話をしたのは、その2隻を使った上での作戦方針を決めるためよ。指揮は難しくなるけれど、戦術長。貴方ならできるはず」

「頑張ります」

「よろしくね。補給が終わり次第発進します。御上くん、楠木さんはちよつとついてきて」

3人が艦橋から出ると、蓮が何故か中腰で夏姫の方へと向かう。

「艦長がうちと夏姫以外を名前で呼ぶの聞いたことなかったんだけど、アレ何。っていうか全体的に柔らかくなってるとるんだけど」

「御上くんと話して心変わりでもしたんじゃないかな？」

「心変わりってレベルじゃないよアレ……」

「沙耶もあたしも、日々変わってるんだよ」

そう言う夏姫の顔はどこか満足そうで、いつもより明るかった。彼女達がどんな言葉を交わしたのかは、他のクルーには分からない。だが確かに、彼女達は変わり始めようとしている。人が内に秘めることは、誰にも分からないものなのだ。

——第8話 「届かぬ願い」——

第9話 「防衛ライン」

「やつぱり、増援の2隻が空母なのが問題ですね……」

「ええ。これだと依然、ガミラスに前線を頼まないといけなくなるわ」

「……ガミラスの損害は免れない……」

楠木の一言で沈黙が流れる。

「……。艦長。意見具申しても」

「そのために呼んだのよ。意見を聞かせて」

「本艦には主砲がありません。その分のエネルギーは、露天駐機やワープの時に飛行甲板を守るためのエネルギーに使われています」

3人が見るモニターにシナノが映し出される。

飛行甲板へのエネルギーの値を示すバーが下がる。

「本艦の飛行甲板の防御能力はこのエネルギーに支えられています。でも、前回の戦闘で本艦のパルスレーザーと艦砲は十分な効果を発揮できていませんでした。だから、本艦の火力を底上げしたい」

代わりに、砲塔と艦首パルスレーザーへのエネルギーが増える。

「艦砲へのエネルギー増加は回路の切り替えでなんとかあります。パルスレーザーはそうはいかない……本来別の回路で動いているものなので、根本的な改造が必要です。戦闘は続きますが、この改造の許可をいただけないでしょうか」

——艦橋。

「飛行甲板、波動防壁へのエネルギー供給を停止しました。これより20cm砲塔への回路切り替え、補強作業を開始します。艦首最上甲板パルスレーザー、1番から順に作業を開始します」

船務長のアナウンスの後、回路が遮断される音が響いた。

窓からは偵察として飛び去るコスモタイガー2個編隊の航跡。

代わりに、偵察に出ていたガミラス機が帰還してくるのが見える。

「ガミラス指揮艦より入電。系外に小規模ながら重力場の乱れを確認」

前回の一件の後、ガミラス側の指揮系統を確立させるため、シナノの下にガミラス指揮艦というものを定めた。

平時は指揮艦を通してやりとりを行い、有事の際は指揮艦を臨時の旗艦とする取り決めである。

また、撤退の際はシナノと地球艦艇が殿となりガミラスを優先的に後退させる事も決

められた。ガミラス側はこれに反対したが、沙耶の説得で承認されたのだ。

指揮艦となったのは旗艦能力を持つゲルバデス級であった。これにより、艦隊は2方面作戦をはじめとした柔軟な作戦が可能となる。

「偵察隊へ、ガミラスが観測した重力場の乱れの調査を行え。艦隊は現状を維持しつつ、交戦準備」

尊の指示と同時に、周囲に展開するガミラス艦隊の目がオレンジへと変わる。

「リーダーに感、前方に大規模なワープアウト反応!」

「偵察隊より、敵総数不明ながら、我が艦隊の3倍以上は確実との報告」

「3倍……!?」

動揺の声が響く。

沙耶も眉をひそめたが、艦隊への通信を開いた。

「我が艦隊は、本戦闘を防衛陣形にて行う。各艦は、退路を維持しつつ指定ポイントへ移動せよ。地球側航空母艦へ、艦載機発艦と同時に主砲用意。艦載機は発艦後、艦隊後方に陣取り、砲の射程から離れよ。ガミラス航空部隊は爆装で待機。……生きて帰りましょう」

指示の直後、シナノと2隻の空母は前進して艦載機を飛び立たせる。

2隻の空母が共に主砲塔の用意を始める背後では、シナノを守るようにガミラスの戦

闘艦が展開した。

発艦した艦載機はシナノの上へと逃れ、帰投した偵察隊は収容される。

「地球艦隊、艦載機と共に前進。……作戦開始！」

艦隊の艦砲射撃によって敵の前衛部隊は動きを鈍らせ、爆装した艦載機がより深くへと突入していく。

「ガミラス艦隊へ、本艦は現在火力増強作業中のため、砲のいくつが使用不可能となっている。本艦の防衛をお願いしたい」

尊の通信と同時に、遙か前方では爆発の閃光が瞬く。

ガミラス艦隊はシナノを囲む輪型陣を組み、各方向に砲塔を向けた。

その上空を、シナノから発艦した機体が飛び去っていく。

敵の数は強大だが、この艦隊の練度ならば――。

そんな願いは、数時間で潰えた。

戦闘開始から、敵は少ない対空砲で的確に艦載機に命中させて戦力を削っていた。

また大型艦を盾に地球空母の攻撃を受け止め、その間から小型艦を送り込むこと、
いとも簡単にシナノとそれを守るガミラス艦隊に肉薄してみせた。

「バレルロール、下に潜った艦を迎撃！」

艦底へ入り込んだ駆逐艦へ巨体を回し、無数の対空砲で艦橋を破壊して無力化したシ

ナノは、くさび型に陣形を変えたガミラス艦隊と共に一転攻勢に出る。

艦隊は砲撃と共に高速で大型艦へ接近し、空母の後退を支援しつつ火力を減らし始める。

艦隊後方へ置き去りにした小型艦は艦載機の雷撃と爆撃の雨を浴びて動きを鈍らせた。

「ケルカピア級と地球空母は回頭、後方の敵艦を——」

「艦前方にワープアウト反応、数は……」

艦橋のモニターには、遙か遠くで、しかし数千隻という数が出現する様子が見える。

「なに……これ……」

思わず立ち上がる沙耶。

「まさかこれまでの部隊は……」

「こちらの戦力を確かめるための……威力偵察……」

「こつちに増援がない事を見越して本気で攻めてきたのね……」

尊と楠木に答え、沙耶は席のパネルを触る。

「……全艦に通達。退路を確保しつつ、できる限り敵の戦力を減らす。殲滅させる必要は無い。各艦は攻撃しつつ、指定座標へワープせよ」

「逃げる……っていう事ですか」

「そう。戦術長も分かっているでしょう、このまま戦つても全滅するだけよ。心配しないで、ちゃんと考えてあるわ」

「……分かりました」

沙耶の微笑みを見て前を見た尊は大きく深呼吸をする。

「本艦と地球空母は波動防壁を展開し、ガミラス艦隊の前面に出る。ガミラス艦隊へ、損害を避けるためにケルカピア級を先頭に装甲の薄い艦種から順にワープせよ。全砲門開け、使用する兵装を実弾とパルスレーザーに限定し応戦する！」

全ての砲身が一斉に敵を捉え、火を放つ。

撃ち出された弾頭は抵抗の無い宇宙を高速かつ直線に突き進み、大質量の艦が持つ分厚い装甲を突き抜けた。

少しの時間を置いて起爆。宇宙にいくつもの光球を作り出す。

「戦闘中のシナノ航空隊はガミラス空母に着艦し、ガミラス艦と共にワープせよ。地球空母は後退、艦載機収容の後で本艦の支援を行え」

指示と共にシナノは、補助エンジンを点火してビームが照らす宇宙を突き進む。

絶え間なく撃たれるパルスレーザーは艦のパレルロールと共に取り囲む艦に損害を与え、時には艦橋に穴を開ける。

一基しかない砲塔は着弾を見届ける事なく発砲を繰り返し、少しずつ、しかし確実に

敵の目標をシナノに集めていた。

しかし威力向上の改修が済んでいないパルスレーザーでは艦体の装甲は貫通せず、僅かな凹凸を作るだけ。

一基しかない砲塔が放つ三式弾も、命中精度や破壊力が完璧ではない。

シナノの応戦よりも遥かに多くの艦からの攻撃を受け、艦は黒煙に包まれ始めていた。

後方から散発的に行われる地球空母とガミラス艦隊からの支援砲撃で、なんとか大きな損害は免れているものの、その砲撃も撤退が進むと少なくなる。

全長300m以上の艦艇とは思えない身軽な挙動で戦場を駆けるシナノからは敵を牽制するミサイルや魚雷が断続的に撃たれるが、怯む気配はない。

「弾は惜しむな！」

「艦隊のワープは？」

「残りはゲルバデス級とメルトリア級2隻。今はガイペロン級がワープ中です」

「ありがとう。地球空母へ、砲撃をやめてワープの用意を。蓮、シナノもワープする準備
よ」

沙耶の言葉に、蓮は「はあ!?」と振り返る。

「今エンジンの出力いじったらどうなるか分からないぞ!?」

「分かってる」

「今加速したら、もしかしたらシナノは——」

「そんな事はしない！ やってください、機関長！」

背後から聞こえたのは、舵を握る光洋の声。

「……正気？」

「そうしなきゃ沈むんなら、やるしかない」

「攻撃してくる敵艦隊の只中でワープするなんて危険すぎる！」

「そんなの、撤退指示を聞いた時から知ってたんだよ！ やってやる……無駄にしてたまるか」

「無茶はするもんじゃない。この群れを抜け出た後に加速した方が安全だ」

「今シナノが出れば、地球のフネが狙われる。そんなことさせられない」

「このフネが沈むよりはいいだろ！」

「艦長は……いや、この艦は仲間を守る盾になるって言った。仲間を守るのが、今のこの艦の役目だ」

「何をそんなに……」

「いいからやってください。空母もワープの準備中で無防備なんです。今やらないと」

「アンタの肩にどれだけの命がかかってるから分かってんの？」

「分かってるつもりです」

強く、舵を握りしめる。

「……絶対に、トチったりしない」

「つ……どうなっても知らないからね」

「生きてたら、俺を殴ってもらって構いませんよ」

「その言葉、忘れんなよ？」

席に戻った蓮は、そのままパネルを触りエンジンに流すエネルギーを上げる。

敵の艦をすり抜け、太陽の方へ艦首を向けると、眼前ではゲルバデス級がワープしたワームホールとエンジンから青い光を放つ2隻の空母の姿があった。

「ワープ20秒前！」

「ミサイル、魚雷発射管全門発射！ ワープに備えよ！」

近づく敵に全てのミサイルと魚雷を放ったシナノは、眼前に開いた空間に向かって加速を始める。

「ワープ10秒前！」

空母2隻がワープした光を追いかけるように、左右を流れる敵艦の中を突き進む。

時折被弾する衝撃をもともせず、壁のように立ちはだかる艦から解き放たれた刹那

。

——一際大きな爆炎が、宇宙を照らした。

第11番惑星の軌道の上にワープアウトしたゲルバデス級は、即座に目視で味方艦が全
ている事を確認した。

後続でワープしてきた地球の空母へ「我らガミラス、全て健在」という光信号を送る
が、旗艦の姿が見えない事で艦内は騒然となった。

離脱のため甲板に着艦させていたコスモタイガーを全て発艦、艦を回頭してその時を
待つ。

時としては、もしかしたら短い時間だったのかもしれない。永遠に感じるその時を耐
え、拳を握る。

地球空母の甲板に待機場所を移したコスモタイガー全機は格納庫には入らず、固唾を
飲んで見守っていた。

宇宙はただ漆黒で、沈黙していた。
時が止まったのかもしれない。

もしかしたら今見ているこの景色こそ、相転移した後の世界なのか？

そんな、ありえないはずの仮定をも考えてしまうほどに時間が経ったその時、静寂は、
破られた。

突如宇宙が瞬き、そこから吐き出されるように現れた凍りついた巨体は自ら静止する事もできないかのように勢いのまま流れ始めている。

まわりついていていた氷は砕けているが、明らかに正常ではない。

「牽引ビームを！ ここにいる全艦で止めれば止まる！」

飛んだ声にガミラス艦が動き始める。

しかし。

僅かに輝き始めたノズルは勢いよく炎を噴き出し、艦はスラスタを作動させて姿勢制御を開始したのである。

先程まで消えていた艦橋の明かりが付くのと同時に、通信が届く。

『全艦へ通達。各艦の損害や未確認艦を報告せよ。シナノは健在なり』

「あれは……波動砲……でしたよね」

「ええ、救援のね」

第11番惑星をのぞむ艦橋の中で、尊は振り返る。

「救援？」

「ええ。なんの代役もなしに私達があそこを離れたら、それこそ地球はおしまいよ。私達の居場所も突き止められてしまう。だから、私達が立て直すまでの間止めてもら

わなくちゃ」

「そういう事だったんですね」

答える尊の視界の端に、蓮に腕を掴まれた光洋が連れられていくのが見えた。

「……大丈夫かな？」

「心配はいらないと思うわ。多分ね」

シナノへ戻ってくる機体が窓の外に見える。

ガミラス指揮艦からの「我が艦隊の喪失艦無し」の報告を受けて微笑み、沙耶は帽子を取った。

艦橋の主幹エレベーターを出た2人は、廊下の片隅で向かい合う。

「結果としてこちらは無事だったわけだけど」

「は、」

「まあまあ、そんな固くならなくても。べつに説教しようってんじゃないし、殴る気もないからさ」

にへらと笑う彼女に肩の力が抜ける。

「まあどつちにしろ、この後11番惑星に入港したら点検に修理に改修に忙しくなるんだ。でも飛べないからアンタ、暇になるだろ？」

「……あー、多分」

「つて事で、うちに付き合え！ やる事がいっぱいあつて手が回らないんだよ」
「分かりました。罪滅ぼしもかねて、ですな」

「罪滅ぼし……まいつか。そんなことで、よつろしくう」

ひらひらと手を振つてそこから立ち去る蓮を見送り、光洋は艦橋へ戻つた。

シナノはガミラス艦と空母と共に、第11番惑星へと降り立った。

シナノがこの宙域で演習を行なっていた頃に使っていたドックに再び戻り、修理と改修が始まつた。

雪辱を果たすために。

——第9話 「防衛ライン」——

第10話 「継がれる想い」

「蓮、エンジンの方は大丈夫なの？」

艦長室。

向かいに座る蓮が持つてきた資料を片手に聞くと、彼女はコーヒーカップを置いた。

「修理はちよいかかるね。でも大丈夫、航海長も手伝つてくれてるしさ」

「手伝わせてるんじゃないか？」

「人聞き悪いねえ……確かに最初はやらせてたけど、段々ノつてきたみたいで」

「そう。苦じやないなら良かったわ」

「頼りになるよ、アイツは」

「貴女がそんな顔するの、珍しいわね」

沙耶の顔が緩む。

キョトンとした顔の蓮はしばらく考えると、突然笑い始めた。

「バカ言え、うちはそんな軽い女じゃないっての」

「そこまでは言つてないでしょう？」

「目は口ほどに物を言う」

「そう？ それなら貴女の日も」

「そんな目はしてないっつーの」

座り直した彼女は、コーヒーカップを口につける。

「……本当はさ、思いつきりぶん殴ってやるつもりだった」

「しなかったって聞いたわ」

「してない。アイツ、あんまり話したこともなかったけど、もつとぼんやりしたヤツだと思ってたんだ。操艦の腕は信用してなかったわけじゃない。でもうちは咄嗟に無理だって思った」

沙耶は彼女の顔を見ないよう、あくまで資料に目を落とす。

蓮の言葉は続く。

「違っただよな。アイツの目を見たら、うちは失礼な事を思ってたんだって。それに、あそこから抜けたら、うちらはどうなってたか分からなかった。あの場所から加速をかけるのと、抜けた瞬間に蜂の巣にされる可能性を考えてなかった。戦術長に後から聞いたよ」

背もたれに身体を預ける。

「もつと信じないと……あの件で殴られるのはうちの方だ」

「彼、きつと貴女を殴ったりはしないわ」

「知ってる。アイツがそんなヤツじゃないのは」

「……そう」

「結局うちは、なーんにも分かかってなかったんだ。ここ最近ずっと、そればかり考えてる」

深い、深いため息。

「きつと彼は、貴女が思うより気にしてないわ」

「気にしてんのはうちだけ……だとしてもさあ」

「その気持ち、言ってみたら？」

「……失望されそう。信じてなかったんだって」

「大丈夫よ」

「悩んでるところ見せるなんて、うちらしくないし」

「人間だもの。悩むこともあるわ」

「そうかな……」

「少なくとも、私のところで愚痴るより建設的じゃない？」

「……」

少しムツとした顔を見せた彼女は、バツが悪そうにふいつと目を逸らした。

同じ頃。

「戦術長、パルスレーザーの改良は3番砲まで終わりました。20センチのシヨックカノン増強ももうすぐで」

窓越しに甲板を見下ろしていた尊に楠木が報告する。

「ありがとうございます。順調で良かったです」

「……ごめんなさい。改良作業のせいで、戦闘に不便を」

「いえ。使えたとしても、結果は同じだったと思います」

「でも」

「この艦の武装は対艦戦闘には向かないんです。それを対艦戦闘できるようにしてもらってるのに、楠木さんに文句は言えませんよ」

屈託のない笑みをせる彼に、肩の力が抜ける。

「ありがとう」

小さく呟き、彼女は踵を返した。

歩き去る音を感じながら、尊はこの星の太陽に手を伸ばす。

窓越しに光るそれを手のひらで隠し、影になった手の甲を見つめた。

「僕は……何ができるんだろう……」

「あれっ？ 沙耶達は？」

翌日の事である。

艦橋に上がってきた夏姫の声に、作業服姿の光洋が振り返る。

「今日は艦を離れているそうですね。確か尊と朱音と行政府だったかと」

「そっか。楠木さんも……で、キミはこんなところで油売っていいの？」

「機関長に、『この星に来てから張り切りすぎだ。今日はもう休め』って追い出されました」

「頑張ってたもんね。今日は私がいるから、キミは部屋に戻りな」

「部屋にいても落ち着かないんですよ」

「まあいいけど。身体壊さないですよ」

そのまま席に座った夏姫は背もたれに身体を預け、天を仰ぐ。

——このまま、平和な時間が過ぎてくれたなら。

艦を降り、ドックを出た沙耶達は第11番惑星を管轄する行政府にいた。

「受け入れてくださり、ありがとうございます」

「シナノは練習航海で使っていたわけだし、それに中破でやってきた味方を地球に戻れなど言えるかね。頼ってくれて嬉しいよ」

とても軍属出身とは思えない笑みに肩の力を抜く。

しかし彼はすぐに声色を変えた。

「それで、頼みは補給か？」

「……はい」

「足りないのはなんだ？ 食糧か？ エネルギーか？」

「離脱時に、シナノは搭載していた実弾兵器のほとんどを使い果たしてしまいました。戦闘とワープの余波で波動コイルやその他の物資も少しばかり損害はありますが、戦線復帰のためにも実弾兵器は必須かと思いい」

「実弾か……」

沙耶の答えに、彼はパラパラと手元の資料のページをめくる。

その顔はどこか、言外に「難しい」と言っているようだった。

「シナノは……ヤマト級共通の魚雷とミサイルと20cm用三式弾……」

資料はこれまでこの第11番惑星に船籍のあった艦とそれの諸元、補給装備をまとめたものらしかった。

「魚雷とミサイルはなんとかしよう。ただ20cm砲用の三式弾はさほど用意できないかもしれない。あと……ガミラスはどうする」

「ガミラスは月面大使館の方から、ある程度の武器弾薬を補給するため、この惑星の周回

軌道でゲルバデス級とガイペロン級がランデブーを待機しています」

「そうか。じゃあこつちが用意するのはシナノと2隻の空母だけだな……できるだけはやってみよう」

「変わってないですね。ここはなんにも」

「そうね。平和で何より」

尊の眩きに領き、すつかり復興した建物を見る。

ガトランティスによって破壊された街並みはあらかた回復し、ここは新しい街ができて始めていた。

ガミラスが再建した人工太陽も正常に稼働している。

再建のための資源運搬が収益直後のシナノの任務でもあった。シナノが出撃した時にはまだ復興は半ばであり、戦禍の跡が残る場所も多かったのである。

しかし今彼らが歩いている街並みは、既に戦禍など遠い過去のことのように感じられるほどに発展していた。

ガトランティス襲撃の悲劇を繰り返さぬよう、今のこの星には専属の防衛艦隊が常駐している。それもこの平和に一役買っているのかもしれない。

「軍人さん？」

不意に聞こえた声に振り向くと、小学校低学年と思しき女の子がじっと見つめていた。

楠木と目を合わせ、首を傾げる尊に微笑み、沙耶は後ろにいる母親に会釈をしてしゃがむ。

「そうよ」

「……ありがとう。助けてくれて」

意味を理解しきれず、沙耶はちらりと彼女の母親の顔を見た。

「この子の父親……夫は、以前にもこの星に住んでいた事があるんです。夫を助けてくれたのは、空間騎兵とヤマトだったと教えてくれました。この子には、軍人さんが助けてくれたんだと教えているみたいで」

「そういう事でしたか」

母親の補足に納得した様子で彼女の方に目を向けると、少女はポケットから薄い緑色に輝く石をいくつか出し、両手で差し出していた。

「おまもり。あげる」

「本当？　ありがとう」

両手に受け取った沙耶が笑顔を見せると、彼女もまた眩しい笑みを見せる。

「その石はこの星で取れる鉱石の一種です。夫は鉱夫で、あの時もその石が綺麗だと

持っていたみたいで。その石を持っていた自分以外、近くにいた人は死んでしまったと。だから、その石のことをお守りだと言っていたんです」

「ありがとうございます。……私達にも、効くでしょうか」

「きつと。諦めない人を守ってくれる、みたいですよ」

「行こうか、と娘と手を繋いで歩き出す。

帽子を取り2人を見送る。

その背中が小さくなってから、沙耶は2人と向き直った。

「帰ったらヒモでもつけて、艦橋のみんなに配りましょうか」

「お守りですか?」

「ちようど個数はあるみたいだから」

楠木に微笑みかけると、彼女は少し驚いた様子で。

「艦長も、そういうの信じるんですね」

「住民との交流は大切よ。それに……」

「それに?」

ふと、かつて送り出した父と彼のことを思い出す。

少し前までの自分は、科学的根拠が全てと信じて願掛けをしても何かが変わるわけではないと思っていたし、実際父にも彼にもお守りを渡したことも、自身が持った事も無

かった。

けれど、これを受け取ってわかった事がある。

渡した人の気持ちは、渡された側に通じるといふ確かな実感。科学的根拠などなくても心に感じるものはきつとある。それは必ず、心のどこかで決断を変えるのだろう。

そんなことを考えたが、口に出すのはやめた。

「なんでもないわ。帰りましょう」

——もしこれに、渡してくれた親子の気持ちの他に、これからの私の気持ちに乗せられるのなら。

シナノという艦とそのクルーに対する気持ちは、彼女の中で徐々に、確かに変わりつつある。

彼女がアルタイルに感じていたものより遥かに大きな何か。

それが何なのか、彼女はまだ知らない。

「お守り？」

「また珍しいな、艦長がこんなもんを」

翌日のこと。

艦橋に集まった主要メンバーに沙耶が渡したのは、紐で結んでペンダントのようにし

た昨日の石。

夏姫と共に2人で一つ一つ紐をつけていったものだが、それはあえて言わない約束にしていた。

光洋と蓮の言葉に、沙耶はそれを渡しながら答える。

「街の人から貰ったのよ。きつと守ってくれますようにしようって」

そう告げた沙耶は既に首からそれを提げていた。

翡翠に似た色のその石は透明度がそれよりも高く、外からの光を反射して美しく光り輝いている。

「なるほどなあ……にしても、こんな綺麗な石この星で採れたんだな」

「それには私も驚いたわ。鉱石なのに最初からこんなに透明なんて」

「渡してくれた子のお父さんが鉱夫なら、何かの作業で出た研磨済みのやつだったのかもね」

蓮と沙耶に言いながら席に座った夏姫は、それを右の手首に巻き付け始めた。

「これでよし」

「手首ですか？」

「そう。これでリーダー覗き込んでも邪魔にならないでしょう？」

「あ、確かに」

「でも楠木さんは腕だと邪魔になっちゃうか……ちよつと貸してみて？」

大人しく渡すと夏姫は手慣れた様子で楠木の髪の一部を結び、それを止める髪飾りとした。

「どうかな？」

持っていた鏡で様子を見せる。

「こんな事もできるんですね……」

「紐を長めにしてあるからね。結構色んなことできるよ」

そんな2人を尻目に、他のメンバーも首からかけたり席の目立つところにかけてりと、思い思いの場所に置いていく。

これを渡したことで、彼らの意識は変わったのだろうか。

そう信じて、沙耶は席のモニターに視線を移した。

——いいえ、むしろ変わったのは。

「うちも腕につけようかな。夏姫、それどうやってやった？」

「尊は……お前は普通にかけるのな」

「はい。航海長は？」

「とりあえず席のこのあたりにひっかける。昔は車運転する時とか、こうやってひっかけてたらしいし」

「今でも地球ではやってる人いますけど……」

——きつと、私の方なのね。

彼らの会話を聞きながら、窓の外から差し込む太陽の光に目を細める。

戦線復帰までもう間も無く。

せめて今だけは、何も無い時が流れますように。

溪谷に建設されたドックには、補給物資を運ぶトラックが着き始めていた。

武装の強化も間も無く終わる。生まれ変わったシナノは、飛び立つ時を待っている。

——第10話 「継がれる想い」——

第11話 「願いの灯」

陽の光に照らされた機器や拘束用の器具が次第に切り離されていく。

「慣性制御良好。波動エンジン、量子フライホイールから運動エネルギーをフライホイールへ変換」

「補助エンジン点火。ガントリー解除まで5秒」

艦内に鳴り響く轟音と同時に一瞬艦が下がるが、すぐに慣性制御で浮き上がる。

「シナノ、微速前進」

「微速前進」

高度を上げながら、補助エンジンの推力で前進を始めた巨艦は大きな影を落としながら街の上を重々しく通過していく。

建物の窓ガラスは少しずつ振動し、轟音を立てて通過する巨艦を見送る。

「ガミラス艦隊、空母2隻は既に上昇機動に入りました」

「街への影響範囲外まで航行したら波動エンジンに点火して上昇する。各員加速に備え、第一格納庫の固定を再確認せよ」

沙耶の声からしばらくして、エンジンの音が次第に高くなっていく。

メインノズルの奥から噴き出した炎はそのまま艦を押し上げ、瞬く間に緑の惑星を眼下に見る。

前方には既に隊列を組んで指示を待っている友軍艦が見えた。

『如月艦長』

通信を繋げてきたのはガミラス指揮艦のゲルバデス級だった。

『所定の配置、完了しています』

「了解。あとは手はず通りに。健闘を祈ります」

通信を切る。

目を閉じて深く息を吸い込んだ沙耶は、艦内用のマイクを手にとった。

「全艦に到達。本艦は10分後に作戦を開始する。第一種戦闘配置、作戦に従い航空隊は所定の位置へ」

——前日。

「本艦は明日の正午に発進します。そこで、作戦を共有したいと思うの」

ドックに係留されたシナノの作戦室に集められたのは、シナノの士官とガミラス指揮艦、ゲルバデス級の艦長だった。

全員に配られた端末に映し出された経路図と沙耶の説明を合わせ、作戦を叩き込んで

いく。

「——以上。質問は」

「今我々の代わりに戦闘している艦隊は、本艦の指揮下に入るんですか？」

尊の質問に、沙耶は席に座りながら答える。

「今展開している艦隊は無人艦だけで構成された艦隊なの。本艦が作戦領域に入った時点で、自立思考から本艦からの制御信号に従うように切り替えて作戦を完遂させるわ」「残存数は？」

「恐らく作戦開始時点で3隻残っていればいい方……波動砲の発射台としてしか使われないし、中破でも使い道はある」

「如月艦長。しかしこの作戦では、シナノだけ突出しすぎる。本当に大丈夫か？」

ガミラスの高官の声を向ける。

「大丈夫です。そのために本艦指揮下の地球空母もガミラス指揮艦の指示を聞くようにしてあるのですから。それに本艦はこの惑星で本格的な改修を行った結果、波動防壁の出力を下げないまま火力向上ができています。しかし、もしもの時は」

「……その時は」

「ガミラス艦隊だけが頼りです。ガミラス艦隊はその経験を生かし、本艦および本艦指揮下の艦船とは別行動をとってもらいます。うち、デストリア級1隻とケルカピア級2

隻は遊撃隊として、本艦指揮の艦隊とゲルバデス級指揮の艦隊双方の支援をやつて欲しい。それが私からの要望です」

その言葉に少し沈黙が走る。

「もしもの時は我々が引き継ぎましょう。しかし、だからと言ってシナノが身を投げ打つていいわけではない」

「もちろんです。我々も万全を期して作戦を遂行します。そのために数少ないドックを占領してまでシナノに改装を行ったのですから」

「そうでしたな。我々は、シナノと共に」

ガミラス式の敬礼。

沙耶達がそれに地球式の敬礼で返すと、ガミラス指揮官はさらに続けた。

「我々はシナノと共に戦うことを誇りとし、語り継ぐために生き残ります」

「語り継ぐほどの武勇ではないと思いますが……」

「英雄ほど、自らの功績に謙遜するものです故」

——まぶたを開け、前を見据える。

友軍艦のエンジンの炎と瞬く星々が照らす宇宙を見据え、その先に見える明るい星に手を伸ばす。

——あの人が、見ているようで。

——そんなものは幻。わかつている。

——でも、それでも。

——見ているのなら、今の私に彼はなんと声をかけるのだろう。

そのまま拳を握り、胸に当てる。

ふと見た宇宙には先程見えたはずの明るい星は無く、代わりに胸元の宝石のお守りが外の光を受け輝いていた。

納得する。

——私が、彼から遠ざかっていただけなんだ。

触れたくない辛い記憶から逃れようとすればするほど、それは重くのしかかる。

でも今は。

「……大丈夫。近くににいるから」

小さく呟いた。

きつと、彼ならそう言うだろう。

沙耶と比べ樂觀的だった彼なら、そうやって明るく元気づけてくれるはずだ。

「行きましよう。みんなで」

何かに背中を押されるように立ち上がった沙耶は、指揮官らしい強さと優しさをそなえた瞳でまっすぐに行く先を見つめた。

「全艦へ、旗艦シナノより。全員で、必ず生きて、そして勝って帰りましょう」
沙耶を見つめるクルーの目には、以前のような萎縮はなく信頼が刻まれている。
微笑んで、そのまま続けた。

「今まで地球と、ガミラス星を守ってきた人達の想いと共に。全艦、発進！」

鉄の残骸が浮く闇の中に、一つの閃光が瞬く。

爆炎を突き抜けた青いエネルギーの塊はその先端を分裂させて敵をデブリもろとも消し去った。

艦体に大きく孔を作られた艦が浮遊する中に、一つの巨艦が姿を表した。

「味方無人艦、残存2隻！」

「良かった……指揮権を本艦へ移して。対艦戦闘はじめ！」

楠木が操作するパネルに「接続」の文字が表示されると同時に、煙を上げたままの2隻のドレッドノート級が加速をかけてシナノの両翼に陣取る。

直後、その背後に地球空母2隻とガミラス艦隊が現れた。

「全艦、戦闘開始！」

沙耶の号令でシナノ以外の全艦は急旋回で散開し、シナノと無人艦は加速しつつ甲板とハッチから艦載機を放つ。

「全機、敵小型艦の掃討にあたれ。シナノ全砲門開け、対艦戦闘はじめ！」

尊の指示で射撃をはじめめるシナノが放つ衝撃砲は一撃で敵艦を貫き、パルスレーザーも装甲を撃ち抜いて内部までダメージを与えるほどの威力を持っていた。

「エネルギー砲門の威力向上は狙い通り、いけてます」

「よし、これならいける！」

敵艦隊の頭上に抜けたシナノと無人艦は回頭、静止した無人艦を置き去りにしてシナノは再び艦載機と共に突撃を敢行する。

「無人艦、波動砲用意」

「射線上のガミラス艦へ回避命令。本艦は1分後に急速回頭する」

シナノは巨体を回転させて弱点への直撃を回避しつつ、周囲の艦艇へダメージを与えていく。

そして艦隊の中心部で突如回転を止め、波動エンジンを最大まで噴出させて上方へ逃れた。

直後、その場所を無数のエネルギー体が焼き尽くした。

「波動砲命中、敵艦の3割を行動不能にしました」

刹那、艦橋にアラートが鳴り響く。

「本艦に向けて大型の発砲反応！ 艦隊後方の要塞から、敵の艦艇を巻き込んで本艦に

向かってきています！」

「全艦に緊急回避命令！ 艦載機も急速退避、逃げ！」

艦体のスラストアースターを作動させたシナノはロールして艦底部をビームに向けながらなんとか回避するが、その後方ではいくつもの爆発が起こる。

「味方艦の損害確認！ 本艦も姿勢を立て直す。本艦を含めた残存する攻撃可能な艦艇は攻撃続行、航空機は一旦退避し味方機と自機の損害を確認せよ」

「沙耶」

沙耶の指示の直後にレーダーを見た夏姫が声をかけた。

「すぐ後ろのメルトリア級が動かないの」

「えっ……？ 飛行甲板管制室へ、後方にメルトリア級は見える？」

眉を顰めた沙耶はすぐに呼びかける。

『見えます。……恐らく、さっきのをエンジンに食らったのか艦の後部ブロックが喪失して漂ってます』

「……戦術長。今シーガル、出せる？」

「守ればいいんですね」

「お願い。航海長は——」

「エンジン推力落とせ、後退して盾になります」

「……ありがとう。無人艦は無事？」

「損傷はありますが動かせませう」

「予定変更、シナノの前に展開して弾幕を張らせて。ガミラス指揮艦及び地球空母へ、損傷し動けない艦の乗組員救出のため、本艦は少しこの場にとどまる。援護とサポートを頼みます」

次の波動砲シークエンスを止めてエンジンを点火した無人のドレッドノート級が後退するシナノの前に陣取り、砲撃を始める。

「ガミラス指揮艦から入電。我らはシナノ防衛と支援のため行動を始める。損傷し速度が落ちているケルカピア級2隻を護衛に向かわせた。当該艦は、攻撃は可能のため弾幕を張るとのこと」

「了解。空母は？」

「空母2隻からは共に、シナノ指揮下の無人艦に代わり波動砲シークエンスを行うとのことです」

レーダーでは、地球の空母2隻が止まった場所にデストリア級とケルカピア級が護衛のためとどまり、残りの艦が突撃して数を減らそうとしているのが見える。

「シーガル発艦しました」

第三格納庫から飛び立ったシーガルは、シナノの両翼に接近するケルカピア級を横目

に漂流するメルトリア級に肉薄した。

「第一格納庫及び飛行甲板はシーガルの受け入れ準備を。前方は味方艦のため支援攻撃を続行。楠木さんは両翼についているケルカピア級のダメージ確認。砲撃中に異常があれば報告して」

「了解」

退避していた地球とガミラス航空隊の編隊がシナノの頭上を通り過ぎる。

遠くで起こる爆発の閃光を見つめ、沙耶はモニターに視線を落とした。

——せめて目の前の、手の届く命だけは。

「……………絶対に……………」

拳を握る。

——生きて、帰すんだ。

——第11話 「願いの灯」——

第12話 「未来へ、希望と共に」

「右舷に敵砲被弾！」

「ダメージコントロール、甲板の武装は生かせよ！」

「戦闘継続できない艦はすぐに下がらせるんだ、いいな！」

友軍を従えて先陣を切るゲルバデス級のモニターの一角には、仲間を救うべく留まり続ける旗艦の姿が映されている。

——やはり、見立て通りだ。

微笑んだ指揮官は足を踏み出す。

「我らの同胞を救わんとするシナノを守るのが我々に課せられた使命だ。必ず持たせるぞ」

両舷や艦底部から煙を引きながら、それでも足と砲撃の手を緩める事なく突き進む艦に続くように、単縦陣でガミラス艦隊が敵の喉元に肉薄しつつあった。

後方からゲルバデス級の前に躍り出たコスモタイガーの編隊が放った魚雷とミサイルが行く手を阻む敵艦を沈め、破片を艦体で押し退けてガミラス艦隊が進む。

敵の攻撃は、間違いなくガミラス艦隊に向いている。

そのはずだったか。

「本艦隊の後方に抜けられました！」

「なんだと!?？」

「我が方の攻撃の目が向いていない敵艦隊最外周を大きく迂回して抜けたようです！」
「囷になったつもりが……囷に引つかかったということか……！」

「本艦に接近する艦あり、数5！」

艦橋に響いた夏姫の声に思わず立ち上がる。

「無人艦の目標を接近する艦へ、艦首に波動防壁集中展開！ 迎撃用意！」

沙耶の指示で指向した砲身が一斉射を行う光が窓に入り込む。

「弾着します！」

シナノの甲板から炎が噴き出すのと同時に、砲撃が命中した敵艦が爆散する。

「被害報告！」

「波動防壁貫通。艦首パルスレーザー、1番と3番が大破！ 甲板下、第四層まで貫通さ

れています！」

「くっ……ダメージコントロール、負傷者の確認を。急いで！」

「射撃継続！ 数を減らせ、ガミラス艦のダメージも限界を超えるはずだ！」

尊の指示で砲撃と共に放った艦首魚雷は彼方まで届き、いくつかの爆発を起こした。

——まだ、動けない。

モニターに映る救助隊からの信号は、今も無いまま。

——私はまた、救えないの……。

「技師長、無人艦とシナノの射撃システムを一緒にできますか？」

視線を上げると、戦術長はまっすぐ前を見つめたまま。

「なんのつもり？」

「無人艦の自動照準ではガミラス艦を支援できません。本艦からの手動照準で、前方のガミラス艦を支援します。それと、シナノの主砲の代わりに勤めてもらう」

「……全部を、手動で？」

「僕がやります」

「負担が大きすぎるよ」

振り返った彼の瞳は、以前より力強く、まっすぐに見えた。

「仲間をみんな救うなら、そんな事は言ってられません」

「うん、だから私でもサポートする。後方は任せて」

「お願いします。……いいですね、艦長」

「ええ。もちろんよ」

直後、通信席に通知が鳴り響く。

「救助隊から一報。『負傷者を連れて帰還する。他生存者の救出のため内火艇を2隻要請する』以上です！」

——届いた。やつと、私にも……！

「シーガル受け入れ用意！ 内火艇を即時発進、生存者を救出します！」

入れ替わりで飛び立つ内火艇の脇を抜けて着艦したシーガルはエレベーターを降りて格納庫に入る。

管制室からその連絡を受けた沙耶は、大きく息を吐いて目を開けた。

「生存者収容と同時に空母2隻からの波動砲をもって突破口を開き、本艦は無人数艦を引き連れ最大速度で敵艦隊を突破。要塞へ肉薄します」

振り向いて言葉を聞く面々が静かに頷く。

それに表情が緩んで、言葉が碎ける。

「また、無理をさせるわ」

「いいんだよ。艦長なんだから、こちらに無理言つてなんぼでしょ。やるよ、航海長。うちは、アンタのこと信じることにしたんだ。できるだろ」

「……やってみせます」

「おうよ。エンジンは任せな」

「機関長、エンジンですが、僕に考えがありません」

立ち上がって会話を止めた尊は、沙耶を見つめていた。

——いい目になったわ、彼も。

「作戦、聞かせて」

数多の光が瞬く。

隊列を組んで突き進むガミラス艦は徐々に炎に包まれていった。

それでも仲間のために盾となり続けた彼らは、そこに見えた光をなんと思うだろう。目を見開き、背後からやってきたそれを見る。

既に機関は満足に動きはしない。

回避は不能。だが不思議と、逃げようとは思えなかった。

なぜかは彼らにも分からない。

ただ、それが直撃しない事だけは、理解できた。

艦隊のすぐ後ろで眩い光と共に分裂したそれは、周囲を火の海に変えていった。

その光景を遮るように艦隊のすぐ上を通り抜けた巨艦の影は、あの時見た“英雄”と重なっていく。

——また、アレに救われるのか。

——また、ともに戦えないのか。

「入電！」

「読み上げる」

「『動ける艦は、動けない艦を曳航して撤退せよ。ここから先は——』
接近してきた空母に曳航されていくのがわかる。」

既に遠く離れたその影に手を伸ばし、拳を握った。

——再び託そう。我々が信じた、あの艦に。

「『ここから先は、シナノが引き受ける』」

使える全ての火力を投射しながら最高速で進む艦の傍には、2隻の無人艦が砲を放ちながら同航する。

無人艦の主砲は不規則な指向と発砲を繰り返していた。

それは戦術長の席のパネルに随時手動で入力されたポイントに砲撃しているためであり、忙しなく目と手を動かす彼の姿があつた。

「敵要塞まで、あと10分！」

「シナノ、無人艦共に徐々に被弾が増えています。本当に……」

「今速度は落とせない。エネルギー消費を抑えないと……」

沙耶が答えた直後に感じた衝撃と同時に、飛行甲板を含めた複数箇所から炎が噴き出る。

「航空隊はガミラス艦隊の撤退支援を徹底して！ 本艦がどれだけ被弾しても、こつちに一機も来させないで」

——そう、これでいい。

拡散波動砲で開いた突破口に向かって、救助を終えたシナノが最高速度で突入すると。

提案された作戦は、これを行う事で敵の目をシナノに引きつける事であった。

その通り、残っている敵の攻撃は着実にシナノへ集まりつつある。

「艦長、エンジンがヤバイぞ！ いつ溶け出すかわからん！」

「機関科クルーは退避、エンジンの出力はそのまま。もう少し耐えさせて」

「また無理言ってくる……やってみるけどさあ！」

モニターに向き直った蓮は、機関をモニターから遠隔操作できるように切り替えた。

シナノが通り過ぎた場所には、シナノを見失った敵艦が指向して攻撃を加え始めていた。

その盾となった地球空母2隻の上方から、ミサイルや魚雷が降り注ぐ。

そのまま下に抜けた編隊は地球機とガミラス機で構成された即席の小隊を組んでいた。

機首を上に向けると同時に放った第二波で後続の艦のエンジンにダメージを与え、背後から来た艦砲によって動けない艦は藻屑と化した。

その背後では、損傷したガミラス艦のうち兵装が使えるものは地球空母と共に支援攻撃を行い、損傷の大きな艦は放棄されていた。

ガミラス指揮艦のゲルバデス級はガイペロン級と共に退艦した者たちを收容すべく行動を行なっている。

「旗艦はどうなっている」

「健在です。敵の包囲前に艦隊を突き抜けているようで、包囲もされていません」

「どこへ向かっているか分かるか」

「……現在位置からでは、把握できません」

「そうか……」

直後、扉が開く音と共に多くの足音が鳴り響いた。

それは共に戦ってきたガミラスの兵士達。

「艦長。我々はまだ動けます」

「今度こそ、共に肩を並べて戦いましょう。あの艦と」

「……しかし、君たちは」

打診してきた兵士の半数は怪我を負い、満足に艦を動かせる状態ではない。

前線にいたゲルバデス級の損傷はガイペロン級より激しく、動かせた場合の運用は通常より難しい。

それは彼らの方がよく理解しているはずだ。

目を見た彼は、その力に負けた。

「……わかった。ただし、負傷している者は艦を降りるんだ。動けない艦の生存者はこの艦に集めてくれ」

数分後、飛行甲板からガイペロン級に向けて飛び立った機体を見送ったゲルバデス級は、飛行甲板を回転させながら加速をかけた。

地球空母の護衛を行っていた無傷のデストリア級、ケルカピア級がそれに追従し、損傷はあるが自力航行可能なメルトリア級が最後尾について主砲塔を指向させる。

損傷の激しい艦や速度の落ちた艦は突然回頭を始めた空母の両脇に展開、砲撃を止めた艦の代わりに砲撃を与えていく。

シナノを追いかけて敵艦隊の最後尾に接触した艦隊は即座に攻撃を開始した。

瞬く間に敵の包囲を抜けたガミラス艦隊は、要塞を前にエンジンを止めようとしているシナノを視界にとどめた。

「シナノ……何を……」

「後方の地球空母より退避命令！」

「退避だと……!?？」

「波動砲で敵艦隊を一掃するとの事です！ 我々は射線上に……」

「わかった。全艦退避！」

艦底部からスラストを噴射し、それぞれ上方に退避を始める。

エンジンを止め、静止しかけているシナノに近づくドレッドノート級2隻を横目に。

「……成功を祈る」

——第12話 「未来へ、希望と共に」——

第13話 「宇宙より地球へ」

「機関、噴射停止。慣性航行に切り替え。内圧上昇」

「戦術長。無人艦の砲撃は私が引き継ぎます」

次のオペレーションを始めた尊に話しかけた技師長に笑いかけ、首を横に振る。

「いえ、まだやれます」

「でも……」

「大丈夫です」

「……了解」

技師長の目には心配の色が浮かんでいたが、指示に従ってモニターに向き直った。

「無人艦を重力アンカーで固定。いけます、艦長！」

「ええ。無人艦のエンジンだけで再加速、本艦はこのまま突撃！」

荒々しく両舷に衝突させたドレッドノート級をそのまま繋げ、シナノは後続の敵を振り払って駆け出す。

その背後ではガミラス艦隊によつて左右に分断された敵が二発の収束波動砲で消滅する光が瞬いていた。

「エンジン内圧限界点だぜ、戦術長」

加速に揺れる艦内で聞こえた機関長の言葉に頷く。

「……波動砲、発射用意。エネルギー充填開始。強制注入機作動」

「敵要塞まで距離——」

「ロケットアンカー用意！」

指示を飛ばした彼女に親友が叫ぶ。

「沙耶、このままだと2分でぶつかる！」

「分かっているわ。でも加速はまだ止めないで」

「ぶつける気？」

「違う。ただ、信じてるだけよ」

微笑んだ彼女の目は、とても優しくかった。

背後からの波動砲で敵艦隊が殲滅された事から主力戦艦の砲撃は止まり、全てのエネルギーを推力に回した事で無人艦のエンジンは発熱し始めていた。

次第に配管が溶け落ち、加熱された弾薬が爆発を起す。

「エネルギー充填、70%！」

砲口のシャッターを開放し、光を溜めていく。

無人艦のエンジンからは炎に混じって煙が噴き出し、振動も増えていた。

「無人艦、エンジン間もなく臨界点！」

「速度限界！ 損傷部は速度に耐えられなくなるぞ」

「了解、十秒後に無人艦を切り離します。波動砲、エネルギー充填110%。セーフティロック解除」

突出ボルトのロックが上がる。

「無人艦、分離します！」

楠木の号令で切り離された戦艦はエンジンの暴走で内部から大きな爆発を起こした。

同時に射出されたアンカーを要塞の砲口に突き刺したシナノは、波動砲口の光を増していく。

「エネルギー充填120%！ 薬室の圧力限界だ、いけ！」

「ターゲットスコープ、オープン。電影クロスゲージ、明度10。照準固定、最終セーフティ解除！」

慣性で前進を続ける艦体のスラスターを点火して射線を安定させた。

「衝突まで20秒！」

「対シヨック、対閃光防御！ 発射まで5秒！」

ゴーグルをかけ、トリガーに指をかける。

「4！」

撃鉄を下げ、銃床を押さえる。

「3！」

標的を睨み、十字の中心を見つめた。

「2！」

近づく砲口に狙いを定めて、指に力を入れる。

「1……発射！」

眩い光を放った刹那、漆黒の宇宙に衝撃波が流れていった。

後に残ったのは、無数の残骸とエネルギーの余波だけ。

「シナノは——」

「一体何したらこんな壊れるんだ」

戦闘の終結から1ヶ月。

機関の応急修理をしながらガミラス艦に曳航され、地球にたどり着いたその姿を見て整備担当者の口をついて出た言葉がこれだった。

「……まあ、色々……」

バツが悪そうに目を逸らす彼女は、目の前の艦の損傷に心当たりがあった。

——仕方ないでしょう、これは。

心の中でそんなことを思いながら。

「艦長さんの気持ちも分かるけど、ここまで壊されて直すこつちの身にもなつてほしいんだけど」

その言葉に不快感を露わにし、少しだけ睨む。

「人は死んだら戻つてこれないけど、艦は壊れても直せる。なら、艦の損傷と人の命は天秤にかけるまでもなく——」

「分かった、分かったよ。でも時間はかかるぞ」

「……お願いします」

頭を搔いてドックに歩いていく背中中に頭を下げる。

「ほーら、やっぱり言われた」

「不可抗力よ。1ヶ月かけて外装は手付かずでとりあえずワープできる程度……」

「ま、最後の補給の時に資材ほとんど置いてきちやつてるし、そうなんだけど」

「それより、夏姫はこんな所まで来なくてよかつたでしょう」

「沙耶が行くなら、私もセツトだよね」

「セツトつて……」

「あつ、鼻で笑つたな！ 大真面目なのに！」

憤慨する親友の横を抜けて歩き始める。

「お疲れ、艦長」

「貴女も来てたのね、蓮」

「うちの長だからな。車くらい出してやらないと」

「今まで一回もやったことないでしょう」

「チツ痛いところつきやがる……艦長殿……殿……？ 姫……？ が傷心じゃないかと

思いまして！」

「ずいぶんと言い方が投げやりね」

「あのなあ、気イ使つてやってんだから、夏姫と一緒にさっさと乗りな。気晴らしにドラ
イブでもしようぜ」

むくれながら車を指した彼女に微笑んで、2人は扉を開けた。

地球はもう夏になっていた。

綺麗な内装の車内は空調は効いているが、外が猛暑なのもあって生ぬるい風が入って
くる。

「ねえ、蓮」

「空調の文句なら聞かないぞ」

「……なら、なんでもない」

「マジ？ やっぱぬるい？」

後部座席で会話を聞いていた夏姫が突然笑い始めた。

「沙耶もそんな事言うようになったんだね」

「私、何も言っていないでしょう」

「目が言ってるの。それに、昔の沙耶なら口に出そうともしなかったよ」

「一体何だと思われてたの……？」

「機械っぽかった」

「機械……？」

「うん。多分、任務に着く前……ううん、私と喧嘩するまではみんなにとって沙耶は怖い人だったと思うよ」

——言われなくても分かっている。

そうは思ったが、それだけに自覚はしっかりとしている。言い返すつもりは毛頭ない。

「……うん。ごめんなさい」

「いや、アレはほら……もう終わった事だし。それに、今は違うよ」

「そうだなあ。あまりに変わりすぎてみんなびっくりしてたし」

笑いながら会話に入ってきた蓮に嘆息し、同時に頭を抱えた。

——怖い指揮官か……そうなりたくなかったんだけど。

「沙耶つて案外打たれ弱いよね」

「ほつといて……」

「やーだよ。……次はもつと、そういう所見せなよ」

「それはイヤ」

「イヤじゃない。見せなきゃダメだよ、可愛いんだから」

「夏姫は私にどうなつてほしいの？」

「みんなに好かれる艦長になつてほしいかな。あわよくば、いい人見つかるといいんだけど」

「……もう作る気はないわ」

「今はそうでもいいよ。いつかね」

「夏姫の方が早いわ」

「いいや、この中で一番早いのは蓮だね」

「はあ!?」

突然の話題に動揺したのか、見晴らしのいい直線なのにハンドル操作が揺れる。

「あははっ、動揺しすぎだつてば!」

「急にうちに振るからだつて。あと笑うな!」

「それで、蔵馬——航海長とは、上手くやってるの?」

「沙耶まで……うちと光洋はそういうんじゃないって!」

「前まで名前で呼んでなかったよね」

「……うつせ」

「なるほど、お付き合い一歩手前ですな」

「夏姫は解析すんな!」

他愛のない平和な会話。

そのうちに、車は海を見下ろせる道に出た。

「ガミラスの人たち、今何してるんだろう」

栈橋に停泊している宇宙艦を眺めながら夏姫が呟く。

「しばらくしたらガルマン星に行くと言いたわ。私達が戦ってる間にガミラス星が消滅したみたいだし、今はガルマン星移住のためボラーとの戦争中。同盟国とはいえ、地球に軍を割いてる暇はないって事ね」

「そっか……地球を守ってくれてたのに、故郷が無くなってたなんて……」

「彼らの家族はみんな地球や太陽系の都市に移住しているはずだから、私達と戦っていた人達の家族は全員無事……これだけが救いよ」

「シナノが助けたメルトリア級の生存者もガルマン星に行くのか?」

蓮の言葉に、沙耶は首を横に振る。

「入院している人もいるし、艦も無いから」

「まあボラーがガルマン星の方に注力して太陽系への侵攻は無いって話だし、ある意味地球にいるのが安全かもしれないな」

「宇宙に、本当に安全な場所なんて無いわ。シナノと入れ替わりで入った艦隊だって磐石ではない」

「でも今は他のガミラスの植民星より安定してるし、ガルマン星も含めて少なくとも地球の方が安全だよ」

「……だといいわね」

遠い目で水平線を見つめたまま相槌をうつ。

その沙耶に話しかけようとした夏姫を蓮が止め、しばらく無言のまま車は走り続けた。

蓮はそのまま2人を家まで送り届け、自分は他に用があるからと、また車を走らせた。

残された2人は数年ぶりに見る家の玄関を前に苦笑いする。

「郵便受けって、こんなになるものだっけ」

「中に入ったら凄いことになってるんじゃない？」

「……もしかしたら、艦に戻った方が快適？」

「かもね」

夏姫に笑いかけた沙耶は、扉を開けて中に入った。

部屋の中はホコリはあったものの基本的には整然としており、出る前のまま。

一安心したのも束の間、背後の夏姫がため息をつく。

「掃除大変だねこれは……」

「シナノが直るまではやる事もないし、頑張るしかないわ」

言いながら視界の端に伏せて置かれた写真立てを見た沙耶は、それを手に取って微笑む。

「ただいま」

彼の写真にそう告げ、袖を捲った。

「さあ、とりあえず床だけでも掃除しましょう」

「なあに？ 急にやる気出しちゃって。ちよつと休みたいんだけどー」

「今休んだら埃吸い込んで身体壊すわよ」

「うっ……はいはい分りましたー」

「無理してやってもいい事ないから、リビングと自分達の部屋だけね。終わったらごはん食べましょう。夏姫は何がいい？」

「沙耶、なんかお母さんみたいだね」

「貴女が子供みたいなのよ。いいから、晩ご飯考えておいて」

「はぁーい、お母さん」

「本当にやめて」

2週間後。

地球艦が海に浮かんでいる港の一角に、3隻の異星の艦があつた。

「もうあちらへ？」

2週間ぶりに袖を通した軍服を整えながら、沙耶は高官と握手を交わす。

「ガルマン星もボラーの手がありますから。私個人としては、もう少し地球にいたい。

ですが、我々はガミラスの軍人です」

「任務、ですからね」

「……あなた方と共に、地球のため戦えた事は、私の誇りです。ガミラス無き今、私の心の故郷はこの地球……この星のため命をかけられた事は、たとえ公式のものでなくとも、何よりの武勲となるでしょう」

そう語る彼の顔は明るい。

これからボラーとガミラスは本格的に戦争に突入するだろう。

そのための招集、死地に赴くとは思えないほどに清々しく笑う彼は、どこかあの日の彼と重なるところがあつた。

「我々にとつても、勇敢で聡明なガミラスの軍人と共に戦えたのは貴重な経験です。地球のために、ありがとうございます」

柔らかな笑みで告げた沙耶の敬礼と合わせて、背後に並ぶシナノの士官達も敬礼する。

「ご武運を。現地までの航海の安全と、またの再会を心から願っております」

「シナノに守られた命、無駄にするつもりはありません」

慣れないであろう地球式の敬礼を返したガミラスの高官は少しはにかむ。

「シナノとあなた方の一層の活躍を願って」

そう言い残し、沙耶たちが見守る中で彼は艦に乗り込んだ。

出港、やがて離水して空に消えていくゲルバデス級、メルトリア級、デストリア級を見送った彼らは、沙耶の合図で帰路につく。

「無事でいられるかな」

親友の言葉に瞳を閉じて、彼女はどこか清々しい顔で空を見上げた。

「私には分からないわ」

「……そうだね」

「でも、信じてる。きっとまた会えるって」

陽が落ちた空には星が瞬き始めていた。

一際明るく光る星に微笑みかけて、沙耶は足を踏み出す。

——私はもう少し頑張ってみるから。

「見ててね、私のことを」

新たな明日へ、決意と共に。

——第13話 「宇宙そらより地球ふるさとへ」——

——完——